

曲 箏

萩岡松韻氏

山室千代子氏



松本操貞氏

佐藤左久氏

氏村鼓木鈴

# 琴曲に就て

琴は叔糸とより成り、之を彈じて音を發するものを云ひ、和漢洋を通じて其種類極めて多し、されどこゝに云ふ琴曲は、書籍の標題として解り易からしめんが爲に、假りに總括したる名を用ひたるのみにて、十三絃の琴、即ち箏曲に限れるなり。

箏曲、宇多天皇の寛平四年に命婦石川色子といひし人、筑紫津山にて唐人より傳授せられたるに始まりしと傳へらる、宇多天皇にも之を學ばれ、爾來代々の宮中に彈奏せらる、治承の頃筑紫に左遷せられし某卿、徒然のあまり箏曲の民間に傳はりしものを集め、詠彈せられたる遺曲を、筑紫流として世に持囃さるゝに至れり、後奈良天皇の頃筑紫善道寺の僧にこの筑紫流の箏曲を能くする人あり、斯道を肥前の人賢順に傳ふ、賢順の



◎琴曲に就て

る年都に遊び、その歩きの足はいつとなく大内のおたり殿大納言の邸前に出で、ゆくりなく聞ゆる斗鶴吟の曲、あまり心ゆかしさに去りも得やらず符めるを、安原に其言められ、それが縁となりて一曲を所望され、大納言はその藝の堪能なるに感じて宮中に召出さるゝの勞をとり、茲に於て思掛なく面目を施せし賢願も、止み難き事ありて筑紫に下向し、大納言より再び上洛せよとの御沙汰を蒙りしも、遂に果すことを得ず、門下に法水と立怨の二人あり、法水の望みに任せて上洛せしめたりしが、法水の藝のより黙進せられず、江戸に下りて箏の糸を簡ひ、柏屋と稱して今に傳はる由。

こゝに岩城平の人にて八橋檢校と云ふあり、初め法水に就て箏曲を學びしが、法水は到底その師に適せずとし、肥前諫早なる師の賢願に紹介して、其門に遊ばしむ、八橋が非凡の絃才は、遂に出藍の藝をほし、いまにす、後京都に上り六角西に住す、

紫流の曲調稍高雅に過ぎ、俗耳に疎きをさと、三絃に倣ひて組歌を編成したるが、所謂表組、裏組、中組、奥組の三十六曲なり、而して箏曲を三絃にうつし合はすこと創む茲に於て八橋流なる一派起るに至れり、貞享二年七十歳にて没す、其藝道を傳へられたるものに北島、生田、隅山、繼山、藤池などの諸檢校あり。

生田檢校は八橋の四代目なるが、絃才ありて本曲の数を多くし、爪の拵へ方をかへなどして、遂に生田の一派を起す、されば八橋三代目迄に於て八橋の流儀をそのままに傳ふるものあり、生田流は京都、大坂、名古屋等に於て盛んに彈奏され、隨つて各所に多少の相違を生ずること、なれり、江戸のは大坂流なるものより傳はりたるもの、如し、村橋安村、三橋の三檢校は生田流の名手として廣く世に知らる。

三橋檢校の流れを酌める生田流の名人に山田松黒なる町醫あり、例の箏曲大坂抄

◎琴曲に就て



◎琴曲に就て

四

を著はして有名なる人なり、江戸赤坂に住す、本業の醫術より琴曲に親しみ、朝夕彈奏して樂みしが、まさかには琴曲師ともなられず、篤志の人もありは傳へんと思したり、縁は異なるものにて、こゝに三河の産にして常木斗養一と云ふものあり、年滿十二、按摩を渡世として上下數百文を流し歩く、其の聲の捨てられぬと、一器はあり氣なる相貌に、山田貞手は呼入れて、琴曲を學ぶ氣はなきやと云へば、斗養一は家計が許されずと答ふるに、その事ならば變りるに及ばずとて、遂に弟子となし、教ふる人の丹精と、學ぶもの熱心とは合体して、斗養一の藝は比類稀なるものとなれり、官給も尙當より檢校に進みたるより、師は姓を譲りて、爾來山田檢校と稱す、山田檢校は世才に富み、筑紫流より再轉して生田流となりし琴曲も、未だ高尙にして東都の人氣に達せずとなし、當時の學者に作歌を乞ひ、吾妻筆譜を編み、面白く俗耳に入るべき歌詞に作曲し、筆の形も生田

流の長いそ、跡先もの、素筆の三種を折衷して、あやめ形、あきとり形なるものを作り、爪も丸きを用ひ、姿勢の在來や、斜に座せるを尙向にしたりしが、後期の如く世に傳はれたり、

山田松黒の二番弟子に山田檢校と相譲らざる名手あり、神田邊にて饒なる家に育ちて人品もよき人なりしが、師は一番弟子に姓を譲りたれば、之に松黒の名を與へ、松黒檢校と稱し、後に總檢校となりたり。

檢校には家業として琴三絃を學ぶと、別に檢校の法と云ふものあり、總檢校上落の際には花園御殿に召され、宮家格を以て取扱はれ、大僧正と待遇を同じくせられ、琵琶にて平家の秘曲を彈するを例とす、三ヶの津流下座と云ふ聲助らしき格式ある也、後小松帝に寵愛せられたりし琵琶師竹永檢校の例により、爾來三位以上ならでは着する能

◎琴曲に就て

五



◎琴曲に就て

はざる濃紫の衣を着するを許されたるより、松尾檢校も紫衣を着して禁中に平家  
 を強じたる輩なり、作曲にも堪能にて、吾輩等諸申千さとの梅の曲に、同檢校の作の  
 紛れ込みたるものなりと云、かばかりの人も髪は廣く傳ふを得ず、流波二代にて絶  
 山田檢校には門人極めて多く、其姓を襲ぐものなかりしが、没後山田流として、江戸  
 の箏曲は山田流に限るもの、如くなれり、山木、山勢、山登、小笠原、白勢、中能島の  
 諸檢校互ひに覇を争ひ、いづれも一方に雄視す。

山木は純山田流とも云ふべく、山田檢校の二番弟子より三世檢校にて、四世千賀  
 に至る、千賀翁は御歌金剛宮に作曲し、梨本宮妃伊都子殿下の末子鍋島家に在せし十  
 一才の時、御前演奏に隨從を許されたる名譽を有す、富本節を好みて箏にうつしたるもの  
 多く、淺間、鞍馬などを重きものとして教授すと聞く、三絃の諸侯邸に卑しめられて強奏

を許されざる中にも、河東、富本などは上品なる曲話なればとて、箏にて其曲の形を味  
 ふの便宜の爲に、江戸淨瑠璃の箏曲に乗りしもの少からず、斯くて江戸淨瑠璃の隨一な  
 る富本に手をつけしは實にこの山木千賀翁なりしなり。

山勢の初代は越後の人にして、初め生田を學び、老年山田檢校に入門し、其師授を受  
 くる程にも至らざりしが、山木、山登、兩檢校等と名を齊うせし名手なり、三代目松  
 韻は稀世の名手にして、數年前没するに至る迄斯道の爲に力を盡し、東京音樂學校  
 にて邦樂教授の元祖となれり、彼の文部省が音樂取調所を置きし時伊豆本松齡、中  
 能島松登と共に、箏曲研究の任に選ばれたるは人の知る所なり。

小糸大檢校も越後の人にして、亦山田流に遊ぶ、後西部に學ぶこと數年、山田生田の兩  
 派を折衷して其粹を捉え、箏曲の大家として亦一方に霸たり、盲琴、中能島は其門に出

◎琴曲に就て



◎琴曲に就て

山登は山田檢校の門人として、河東節を琴曲にうつしたるもの多し、一代にて絶え、萬和なる人其後を繼ぎたりとて突如として出づ、外に山登を名乗る家あり、一を天神下の山登といひ、一を三崎町の山登と云ふ、天神下なる山登萬和、歌に巧みにして河東節を加味するもの如し。

近代の名人に柳田榮流なる人あり、山流檢校の門人なり、且つ中流島檢校に就て三絃を學び、京唄、長唄、一中、河東、宮本等の諸流を研鑽し、遂に山田流の宿老と仰がるゝに至れり、性謙讓にして技に誇ることなく、常に自家の藝を神護にするものとし、毎歲江の島辨才の祭典に參籠して琴曲を奉奏し、或は祖師山田檢校の墓碑を修繕したる等の美談多し。

斯くて東都の琴曲界は、芝に山木と山登あり、下谷に山勢、小名木ありて、この四家對立の觀ありしが、明治維新になりて、一時琴曲は廢れ、月琴の大流行を見たる事あり爲に筆は毀たれて飯糰となり、其處此處の縁目にも、琴の夜露に洒さるゝが多き有様に、流石の琴の名家も、生活に負はるゝこととなり、奥村眞佐子先づ寄席に現はれ不了簡と稱す、曲界に妙を得て滿都の子女を喜ばせたり、山勢、山木其他の名家も、吾に或は代へられずして、一先づ寄席に墜落したるが、曲彈は誰にも出來得ると云ふ勢にあらば、七福神、頼光など云ふ悪作の寄席的作物を出して、盛んに琴曲の相場を落下せしめしが西南の役も濟みて、殺伐の氣風は一轉して、再び目を拭うて琴曲の上品らしく生れ代るに至り、現時最も隆盛を極め、中流以上の家庭にはなくてはならぬ藝となれり。

近時如何なる人によつて、堪能なる藝を聞かるか云ふに、其數流りに多くして著者

◎琴曲に就て



◎琴曲に就て

の寡聞、殊に箏曲界には隠れたる名人少かられば、今廣く知られたる三四の人を紹介すべし。

松本檢校は採貞と稱し上野の人なり、初め小名木檢校に學び、師没後座法により其高弟白勢檢校の弟子となる、兼て國學に通じ和歌をよくす、明治廿六年直夜の友なる雜誌を發行して盲人を奨励し、別に心種會を起して和歌を教授す、作曲作歌多く、生田の秘事を傳ふるもの、東都に於て現時松本檢校一人あるのみ、祖を敬ふる場合の如きは先づ其誰の講義をなす由、檢校先年類焼に罹りたることあり、家人に命じて書籍を搬出せしめ、遂に樂器を全部烏有に歸したりと、藝界の一名物と謂ふべし。

蒸岡松韻は山勢松韻の門人にして、初め松岡と稱し、後師の名を襲ぐ、現時第一流の箏曲家と稱せらる。

山室千代子は山室保嘉の後継者にして、保嘉は名人玉川檢校の流れを傳む、千代子は間秀箏曲家として、生田流の加藤柔子と並び稱せらる、門人極めて多し。

佐藤左久は松本檢校の相弟子にして、手事に於て當時左久の右に出るものなしと聞く、上原眞佐喜は奥村曲彈の門人にして、箏曲家中亦指を屈すべきもの、一人なるべし、

其他山勢松韻の門人今井慶松、榎田榮清の門人高橋榮清等あり、女流にて小山喜美子非凡の藝腕を有す、岡田杉勢、馬場美勢、亦其名を知らる。

生田流に徳永里調あり、替て奥村不了簡と共に寄席を打ちたることあり、加藤柔子は眞に其技能の秀づるを以て知らる、京都に古川瀧齋あり、有名なる藤岡檢校の門人にて當代第一人と稱せらる、近時湯原 東京音楽學校長、上原六四郎の兩氏等、生田流の勤興を圖り、東西兩京に名手亦少なからざれど、一々これに舉ぐるの類を避く。

◎琴曲に就て



◎琴曲に就て

終りに逸すべからざる人あり、鈴木鼓村と云ふ一風變つた先生なり、初め八橋流を學び、後生田に轉じ、山田流にも學びたる人にて、海田流、葉等の新體詩を作曲し、常に新機軸を出して天下を驚かす、著者は斯る風流争曲家の級出を驚むや切なり、箏曲家の惡くすまし、箏の手事師といはんより、箏の手事師の多きを思む、而もその手事師と云ふは、大家と稱せらるゝものに多きぞうたてき。

明治四十四年の夏軒の松風琴の音に通ふの時

中川 愛 氷 誌

琴 曲

目 次 (いろは順)

山田流の持歌とせるもの

今様淺妻船……………一

糸の戀……………二

葉がくれ……………二

播磨八景……………三

春宮曲……………五

初若菜……………六

花妻……………八

花のかゝみ……………九

花の雲……………一〇

花ごよみ……………一一

ほととぎす……………一三

蓬萊……………一四

布袋……………一五

とぎはのさから……………一六

目 次

一



千ごせの春……………一八  
 千箱玉章……………一九  
 千代の壽……………二一  
 千さとの梅曲……………二三  
 長恨歌曲……………二四  
 かさのうち……………二七  
 かざしの雪……………二八  
 つきぬ餘波……………二九  
 春日詣……………三二

頼光……………三三  
 田植の幸……………三七  
 竹筏……………三九  
 子日遊……………三九  
 夏……………四〇  
 夏の詠……………四一  
 夏やせ……………四二  
 那須野……………四三  
 白の聲……………四五

八重垣……………四六  
 山ざくら……………四八  
 まがきの菊……………四八  
 稀のことぶき……………五〇  
 まつかせ……………五一  
 松の壽……………五二  
 芙蓉峰……………五三  
 小督曲……………五五  
 こゝろの奥……………五七

壽くらへ……………五八  
 江島曲……………六〇  
 天長節……………六二  
 葵上……………六四  
 あづまの花……………六六  
 あやめ草……………七〇  
 あけがらす……………七〇  
 相生……………七一  
 西行……………七三



櫻がり……………七三

さみだれ……………七四

紀の路の奥四季の段……………七五

曲水……………七七

熊野……………七八

弓八幡……………八〇

めぐり逢瀬……………八一

御旗の勳功……………八二

皇國の榮……………八五

忍ぶ草……………八五

四季の艶……………八七

新雪……………八七

清華園……………八八

住吉……………九〇

生田流の持歌とせるもの……………九二

磯千鳥……………九二

今小町……………九三

六段戀慕

春重……………九五

春の曙……………九六

花の旅……………九七

萩の露……………九九

放下僧……………九九

茶おんど……………一〇〇

若菜……………一〇一

川千鳥……………一〇三

楫枕

楫枕……………一〇二

通ふ神……………一〇三

鉄輪……………一〇四

夜々の星……………一〇五

四つの色……………一〇六

四つの民……………一〇七

四つの袖……………一〇八

玉川……………一〇九

玉の臺……………一一〇



瀧づくし	二〇
袖香爐	二一
鶴の聲	二二
椿づくし	二三
根引の松	二三
難波獅子	二四
名取川	二五
ながらの春	二七
七小町	二八

菜の葉	一九
むしの音	一九
娘道成寺	二二
宇治めぐり	二三
梅の宿	二四
くる髪	二四
八千代獅子	二五
八重衣	二五
八しま	二六

藤戸	二七
こすのと	二九
狐會	二九
越後獅子	三〇
出口の柳	三三
葵の上	三三
梓	三四
東じ	三七
あしかり	三八

西行櫻	二八
里の曉	二九
嗟娥の春	四〇
さちし	四一
さむしろ	四二
櫻川	四三
酒	四四
残月	四五
貴船	四五



目次

ゆかりの月……………一四七

夕顔……………一四八

夕空……………一四九

御山獅子……………一四九

松陰の月……………一五〇

松竹梅……………一五一

四季の花……………一五二

四季の詠……………一五二

四季の雪……………一五三

八

深夜の月……………一五四

新道成寺……………一五五

新青柳……………一五七

名所土産……………一五六

ひなぶり……………一五九

關づくし……………一六〇

末の契……………一六一

新作もの……………

千壽……………一六二

四季の歌……………一六三

組うた……………

菜露……………一六五

梅ヶ枝……………一六六

心づくし……………一六七

天下泰平……………一六九

薄雪……………一八一

目次

九

雪の晨……………一八二

雲上……………一八四

薄衣……………一八五

桐壺……………一八六

四季の友……………一八八

須磨……………一九九

明石……………一九〇

末の松……………一九二

空蟬……………一九五



四季富士	一四
雲井弄齋	一六
四季曲	一六
扇曲	一六
雲井曲	一九
羽衣	二〇
若菜	二〇
思川	二〇
橋姫	二五

新雲井弄齋	二〇
飛燕曲	二四

目次終

# 琴曲

中川 愛 氷校訂

山田流の持歌こそせるもの

今様朝妻舟

境過しと心事を  
 美化したるも  
 の一蝶の畫  
 幅を展ぶるが  
 如し

ひと夜かりねにあふみ路の、浅妻山とふかゝらぬ、人のちぎりの  
 名なれやと、なれにしとこの山風に、寝みだれ髪はやなぎかげ、  
 つながぬ舟のうきてよに、つひの寄邊はいざや河、いざしらなみ

◎今様朝妻舟



も聲そへて、うつやつらみの、うつやつらみのうつつなや。

糸の戀

いとしらしき  
糸によする戀  
詞の色も、  
とうれし、い

糸による、ものならなくに我ころ、ほそきは女のつねぐに、  
漸りし神は御推もじ、なつかせなるを中立に、なかだち結びあふたるねやの内、  
とけてはもつれ、もつれては、とけいのむつにむつ言も、つい云  
ひさしてきぬぐに、見送るかさのもみちより、ふかく染めにし  
袖の雨、ふるごとまでも繰かへし、しんきしんくの世の中垣を、  
いつしかあけてそはいやと、おもひぐのつもる小田巻。

葉隠

若き人の血は  
斯くも湧くは  
るべし、  
て更に撫  
すは、  
し、  
深

それ罪ふかき女の身、あるがなかにも河竹の、ひと夜ぐの仇ま  
くら、ほんにしみぐ憂やつらや、とはいふものゝあるときは、  
思ふ男に思はれて、解けて逢ふ夜の嬉れしさは、何にたとへん言  
の葉の、語りも盡きすついきぬぐのわかれ路や、ア、あすの日  
の、暮を待乳の神かけて、かはらぬ色の深みどり、ふかき契のな  
かくに、しげき人目に隔てられ、逢はでもどした心のうちを、  
君ならずして誰か知る、はかなやまゝにならぬ身を、思ひつゞけ  
てひとり寝の、あけゆく空もはしたなく、なく音血を吐くほどゝ  
ぎす、月のかつらの葉がくれか。

はりま八景







みもあつき、君が賜ものかさねていくへ、千代にやちよも、さかへつきせじ。

初若菜

小松原、末のよいひにひかれてや、君が爲とて野の朝戸出に、年もわかなのむそひとつ、つむてふ春ぞかぎりなき、朱雀の御賀にならふたる、萬歳樂や賀皇恩、けしきばかりまひの袖、ためしすくなきみあをびに、おのくころいれたまふ、まづ其得手の人々に、琵琶は螢の兵部卿、たれにこがるゝ名のゆかり、ひかる君には琴のこと、おとこはれいのやまごごと、上手をつくしたまへ

清元などの歳旦、而もめかしら、而も箏吹ら、而も所却つて感服せず

ばず、いとゆうにこそ聞ゆなれ、その十二律十三の、いとし男にあひの手の、六段九段人目のせき、こゆるへうぶのすいめがた、すいめいちどき忍ぶ夜を、君が手琴にかけられて、曲も雲井の翠帳に、こころのおもてうらなくも、あかしやすまのうらみわび、人づてならでその中を、わたせし橋の長まくらはやかさゝぎに、いそがれて、わかれぐるまのなみがへし、かへるなはしの袖たもと、わりなき中のわりづめや、みだれ亂るゝ實心を、しろしめさせたまはれと、のちのあしたのもしほぐさ、かいてまゐらせ候かしく、千とせの松のみどり子に、かへることよみの女文字、とるなるひらく吉日や、猶するひろのことぶさを、つきせぬ春と祝しけ



も、祝しけも。

花妻

萩の下葉の思  
ひの色、ふか  
くも染めてけ  
る哉

誰になびくかいつしかと、ひもときとむる萩が花、錦の床におく  
露の、思ひみだれて秋の夜の、長きよすがらいたづらに、雲井の  
月の影ふけて、とふにつらさのまさるとも、しらでやすぐる秋の  
風、身にしむころとなれもまた、しのびかねてや小男鹿の、聲よ  
り落つる涙さへ、なほはぎが枝にかゝるらし、とにもかくにも  
思ひのあまり、下葉もいまは色にいで、こがると知らばたちこむ  
る、さりのまがきの隔てなく、千秋をかけてむらさきの、ゆかり

わするな萩が花づま、

花のかゞみ

うはの空吹く  
花の香を、啣  
つ心の、ちへ  
届かぬよとて  
は、いやよと  
露骨なれど、  
そこに、おし  
る味ありし

うつれはぞ、花のかゞみにわが姿、うつる心はまことのかけよ、  
おぼろ月夜のわたごのに、人待つかげは誰やらん、うはのそらふ  
く花の香は、こちへと、かぬかいま見の、人目せきちのへだては  
いやよ、せめてたのもの雁のふみ、おくるその日のつじうらく  
に、人來ひと來のはつねもうれし、向ふかゞみのかほよどり、か  
はらぬちぎりかたからめ、きみが代の、めぐみもふかきいけ水の、  
すめるかはづもいはひうた、歌にやはらぐ人心、しづもたときも



おしなべて、花のかいみのくもりなき、はるやひさしき、はるぞ  
ひさしき。

花の雲

立そむる霞の衣はるしるき、ゆるしの色のゆかりある、名さへな  
つかしあやめがた、其琴の緒のそをあまり、三とせの昔しのぼる  
、思ひ出れば如月や、望の夜またでおぼるげに、入にし月の顔  
ばせを、おぼつかなくも今もなほ、ながめやらるゝ大空は、戀し  
き人のかたみかは、残りの雪の故郷の、越路に歸る雁のねも、花  
の雲間にかげ見えて、をこめ子がをこめさびすもから玉を、袂に

讀みて見て筆  
唄らし、歌の  
心の届かぬ節  
は夥しからむ

まきて、處女さびすも袖打かへし、うちかへし、舞遊びしはかし  
こくも、音に聞わし瀧の宮、それはよしの、倭國琴、これは筑紫  
のこさふりし、千代のかみつよ豊國や、とよさかのぼる朝日子の、  
彦の山邊にひさそめて、幾代さかねむ松が枝に、かよふ常磐の家  
の風、つぎぬしらべぞたのしかりける。

花の曆

ことぶきを、こゝにのぶるは年をへて、おなじさくらの花のいろ  
を、染めますものはこゝろから、ひらく日かすをいつむつと、ゆ  
びをり見ればなゝところ、おもひたつ、雲もひとへの上野より、

大まかなる花  
めぐり、曆と  
いふは仰山な  
歌也



ながめはじめて淺草や、かをりはふかき奥やまに、袖ふりあふて  
 いろくの、すがたはゆまにすみだ河、わたし守にことへば、  
 げにもあづまの都ざり、ことばのはしの飽かなくに、きのふとい  
 ひ、けふとひぐらし、とこしなへに、こゝはかはらぬ飛鳥山、と  
 りのかほよのひとむれを、ほろろとほむるうぐひすに、もとより  
 うたのえにしあれば、人のこゝろをやわらぐる、春のひととぎ、  
 小金井の、河の名さへも玉なれば、ひかりのどけきそらに鶴、み  
 ぎはに龜の御殿山、あふげばなほもたかき屋の、めぐみもみつる  
 にぎはひの、民のかすく千代かけて、よろづよしとの花ごよ  
 み。

かくばかり待  
 たれんとはと  
 杜鵑も鳴惜か  
 しするなるべ

ほととぎす

夏の夜の、明くる間はやみかりそめに、見るほどもなき月かけを、  
 惜むとすれどいねがての、枕にかこつほどをさへ、たえてしのべ  
 どおとづれぬ、うしやつらさを人ならば、うらみもはてんかにか  
 くに、雲井に遠きまつち山、こゝろせき屋の里吹く風に、あめも  
 つ空のさつきやみ、やみとあや瀬の川舟に、うきねしつゝも聞か  
 まほし、かくばかりまつとはなれもしらひげの、もりのしたつゆ  
 くさくくに、よのみやびをのあくがれて、君まつよはにかはらぬ  
 は、たゞひと聲のはととぎす。



蓬

萊

霞をわけて 春行水  
の海づらと 同化  
けば 天に 蓬  
と我と 同  
して 我と 同  
葉が島に 遊ぶ  
思ひの 遊ぶ  
るべし

このごのは、むべもごみけりささくさの、三つば四つばのいつま  
でも、かはらぬ春にひなづるの、色をならぶるしら梅の、にはひ  
もころものどかなる、なつをむねなるいづみのほとり、尾を曳く  
龜に浦島が、むかしがたりのいとはかくと、釣の出立のひとが  
らは、雲井にまがふ沖のかた、あらおもしろの青海波と、酔へる  
がごとくたゆたうて、あびむともなく、ゆくともなく、いたると  
ころは蓬萊宮、こがねをのべ、玉をしく、ことなる龍の都にも、  
戀となさけはめにたつなみの、音にさこえし姫はまだ、いひよる

こどもしらぬひの、つくしつくせる心のうちを、それささとれど  
うちつけに、なんといはまのうつせ貝、よその見るめもなか  
に、なかだちいらぬ新まくら、ぬれぬうちこそつゆをもちとへ、  
思へばふしぎのえにしぞと、なごりはつきぬ月日がひ、かひある  
けふの玉手ばこ、たづさへいづれば悠然と、浪のつらみぞさこゆ  
なる、枝はふりても色かへぬ、松風は千秋のころとしも、漸うく  
れたけの、いくよか経べき長生殿、不老門に立かへる、春をかぎ  
ふるさいれいしの、いはほとなりて苦のむすまで。

布

袋



色氣のある布  
袋様のしかし  
厭味のなき所  
に打込みだし

かやうな事を  
ときはのさか  
えとは申すに  
や、さてもむ  
づかしき歌也

◎ときはのさかえ

一六

戀といふ、憂きはかうしたうきものと、合點はしてもしらぎぬの、  
もたれぶくろのながき日も、うちは片手に思ひ寝の、うつら／＼  
とこがれてくらす、そのぬしさんの三重の帯、つひくる／＼とひ  
とへには、むすびもはてぬ春の夢、あだな此の世に墨染の、こち  
や木のはしぢやないものを。

ときはのさかえ

春さぬと、ゆふ告鳥のひとこゑに、明てかすみのせきもなく、見  
わたす山はうら／＼かに、うらべしづかにさゝ波の、よせてはかへ  
しゆたかなる、みよのためしに引小まつ、たが袖引いて姫まつの、

ちざりを結ぶ玉のをの、末もながきにかきがはす、其玉づさのお  
とづれを、まつみはつらや、もしやたそふ、よそにするすみかく  
筆の、とがはなけれどす、いらのうみに、水さす人の、つゝましや、  
心のたけをひとふしに、おもひをこめてくれ竹の、しげりてかよ  
ふ月の夜は、しのびかねしよ濱のまつ、峯の松風さそふとも、た  
いひとすちに此君と、わが名をたて、高砂の、松はゆかしきもろ  
ともに、老せぬ宿は若竹の、わかきは名にし男山、谷の戸いづる  
うぐひすの、毒そへて初音けふ、替引のふうるつま琴の、しらべ  
はつきじ萬代も、道はかわらぬときは木の、みどりの空や山ぞの  
どけき

◎ときはのさかえ

一七







紙のかすを、筆にちかひしすみいろの、こいなか、うき名のたね  
 をまきがみに、ぐちのありたけ文枕、ふみがやりたや室の津の君  
 へ、君がなげぶし、なげぶみなげて、くどきぶみ、夜ごとに通ふ、  
 神かけて、ほんにとりなり、よい封じ文、ちよつとこなたへかり  
 の文、いのりまゐらせ候かしく、ふみも見ずとははしたてのみち  
 よ、みちのきれとて、きれぶみいやよ、ちかひぶみ、いよしごげ  
 んとかいたるは、絆のたねがねむすびぶみ、もみちわけつゝし  
 かのふみ、思ひまゐらせ候かしく、とめてうれしき大和文字、か  
 へすくもめでたけれ、きみは千代ませ、八千代ませ、なほいろ  
 ませや、ばんせいらく、ちはこのたまづさ、たてまつる、これぞ

初句まづ鼻に  
 つく、邊の  
 向島などの新築  
 祝ひなどある歌  
 して、それだへ  
 は聞えぬにけ  
 あらす

ひさしき賞哉

千代の壽

實に日の本の文明に、ひらくや花の時ならん、常盤かきはに色か  
 へむ、枝葉しげりて千代の陰、こもれる松の深みどり、四季折々  
 の花の園、こゝにしめたる高どのは、心も清くすめる世の、玉の  
 臺とがいやきて、たまとしつらふ別世界、見あかね春の風景は、  
 富士と筑波に向ふこし、堤のはなや田をみめぐりと、櫻につづく  
 もろ人の、袖打つれて遠近に、かよふ橋場のわたしぶね、帆あげ  
 る舟や涼船、行かふ縁の糸すぢを、結ぶは神の白髭と、誰がまつち



山夕かけて、棹さすかたはしらねども、いざこと、はんすみだ川、  
 水上清く照る月の、さやけき影は白浪に、よせてはかへしかへし  
 ては、袖のしら露置そへて、秋長月の長き夜を、あかしかねたる  
 手枕に、鳴虫の音もこゑすみて、松風かよふ琴の音の、しらべゆ  
 かしき遠砧、面白や、見渡すながめ白雪に、梢々も埋もれて、山  
 風寒くふり積る、年の貫も春風の、豊に千代の壽と、祝してうたふ  
 つま琴の、音色も高き家の風、吹傳へなんいつまでも、榮わて代  
 々につぎぬ言の葉。

千さとの梅曲

花のいさほし  
 なごいほほし  
 聞えれど、たま  
 づはめでたき  
 歌なり

常任に、ふかせてしかな家の風、世をへてあふぐふみのみち、ひ  
 ろさめぐみをおもふその、こころづくしやらさとまで、にはひお  
 こせし梅の花、こころをそむるひと枝を、たいそのまゝのたむけ  
 にて、天満神のまに／＼と、ゆくての袖もかをるまで、思ひをは  
 こぶおもひ河、水のそこゐもふかみどり、むすぶてにふく春風は  
 けふささらぎの神事に、よるのつゞみのすみのまゝ、真如の月も  
 どころから、和光のかげにかたしきの、花のまくらに夢むすぶ、  
 えにしはしらぬみち芝の、露とみだれん刈萱の、關守る人もこゝ  
 ろせよ、かみもなさはふかきよの、やみにもしるき梅が香、そ  
 も此の花は萬木に魁して、かばかりのかたちいろかの、花なけれ



ば、おのづから、御神もめでさせたまひ、花もまたこゝろありけり  
 とびかよひ、あるじわすれの動を、しる人ぞしることのはの、  
 じびきはやしにとりそへて、きみが千とせをまもるなる、君が千  
 とせを守るなる、うめのにはひや、天に満つらむ。

長恨歌曲

今はむかしもろこしに、色を重んじたまひける、みかどおはしま  
 せじとき、楊家のむすめかしこくも、君にめされて朝暮の、おん  
 いつくしみあさからす、つねにかたはらにはんべりぬ、宮のうち  
 のたをやめ、三千の寵愛も、わが身ひとつの春の花、ちりて色香

愛も戀しや昔ど  
 昔にかはる思  
 の糸、長き恨  
 を引く、なるべ  
 此曲、名手に  
 つて、胸は、断  
 さる、世に、断

もなきたまの、ありがたづねみなれさを、さしてはる、行く  
 舟に、方士はなみのうき寝する、常世の國にきて見れば、樓閣玲  
 瓏として五雲起れり、うちになまめく女の童、ことにすぐれて玉  
 眞の、すがたはいづれ李花一枝、雨を帯びたるそのけはひ、見る  
 はゆそれとことのはも、涙こぼれてらんかんを、ひたすもいかに  
 なれそめし、驪山のむかし思ひやる、あらなつかしのみやこ人、  
 はづかしながらありしよの、そのむつごともさえはつる、露のち  
 ぎりのうさはらし、いふて見よならひとかたに、おぼしめすかや  
 ぶかき江に、春のこぼりのうすきはいやよ、思ひあふ夜はうちと  
 けて、寐みだれがみをそのまゝに、とりつくろはぬ女氣を、可愛



がらんせ、からすばの、いるにこのみをそめ糸の、むすび目かた  
 きたたらひも、えんつきぬればいたづらに、またこのしまにかへ  
 りきて、なほなつかしきいにしへを、おもひいづればあはれなる、  
 そよや霓裳羽衣の曲、まれにぞかへすをとめごが、まれにぞかへ  
 すをとめごが、袖うちふりしころしりさや、さるにてもさみに  
 は此世、あひ見んこともよもさがしまつどり、うきよなれども戀  
 しやむかし、こひしやむかしの物がたり、つくさは月日もうつりま  
 ひの、しるしのかんざし、たまはりて、みやこにかへる家づとは、  
 ふみにもまさるふみ月の、なぬかのよはのさつめごと、比翼連理  
 も今は、や、かれくになりしうきさちまり、天の長しなへなるも、

地のひさしくふりぬるも、つくるときありこのうらみ、めんく  
 らうくとしてたえ間なく、今にのこせし筆のあと。

かさのうら

ほととぎす、あれく月のかさのうち、ぬれぬかほするあどなき  
 を、思ひやつたがよいわいな、よひくごとのせきもりも、ゆるこ  
 ぬからにうきなかは、泣いてうれしきにもあれば、笑うてつらき  
 假まくら、ひとりぬる夜はふたりがさびし、ほんにしんきなこと  
 ぢやいな、ひとまつよひのかねのこゑ、あかぬわかれの雞はもの  
 かは。

ひとり寝る夜  
 二人が淋し  
 情ち得たる眞



かざしの雪

おなじときばの松竹や、冬も葉がへぬかげたかく、つよますがた  
 きたをやかに、なびくさまにぞたぐふなる、千とせくらへのいも  
 どせの、中に生うふ姫小まつ、うら若竹のみどり兒に、おふしそ  
 めたるすいしるや、春をまちえていつしかと、いはひつゝまつか  
 ひあれや、ちひろのうこのみるふさの、振分髪のなりふりも、花  
 のにしきや雲鳥の、あやのよそひのかたすきて、うちたれがみの  
 さねがつら、結びつとさつなまめける、今をつぼみの花さくら、  
 花のかつらや玉葛、くりかへしつゝ、末ながく、しげりさかえん柳

心は讀めぬに  
 あらねど、詞  
 足らず、面白か  
 趣向はあられ  
 りぬ、歌はまぢ  
 じど、

のかみも、冬もなりたるみそのふに、ふりさふりしく白雪を、玉  
 のかざしに千世かけて兒舞。

つさぬ餘波

龜の尾の、山の岩ねをこめて落る、たきの白玉千代のかず、かぞ  
 へもつさす八百万代も、新王の春をむかへていつ迄か、よはひを  
 のぶる長生殿、ゆたかに年のながくれと、思ひしこともいたづら  
 に、まだ風寒を初春の、かすみのきぬのうす物に、つゞまればな  
 らはかなくも、雲かくれにし居待の月、つさぬ餘波は青柳の、い  
 と繰返しくりかへし、かへらぬ物の悲しさに、ひともとらぬ面

行く水の流れ  
 に浮ぶ泡沫の  
 長明なつ消え  
 も、かつむすび  
 と、かつむすび  
 な、果敢な  
 な、や感すら  
 つ、きぬ餘波  
 数を經て、思  
 身の果し、思  
 る、



かげを、したふ心はうば玉の、やみかあらぬかまぼろしの、夢の  
うつゝのゆめ心、思ひみだれて春雨の、ふる屋の軒につれぐと  
こゑもしほれてうぐひすの、ちからなのよや力子の、よやほのぼ  
のとかすむ日かげの長閑けきを、よそにながめて物思ひ寐の、夢  
の枕に有し世を、しのお涙の袖の露はらへごまたもちりかゝり、  
さめておどろくあかつきの、かねのひいさも哀れなり、ぬしなき  
庭に鶯の、来てはさへづる初聲も、今は手向と成ぬれば、名もう  
らめしき不老門、おまへの梅はこゝろなく、ほころびそめていた  
づらに、誰見よとてか咲匂ふ、たかき色香をかたみとも、見て暮さ  
まし、風桃樓の水の調へは、むなしき空にやかよふらん、空しき

そらにや通ふらん

春日詣

いにしへの奈良のみやこの八重がすみ、かすがの野邊のさをしか  
の、つのもいつしかをちこちの、ゆさゝの人のながめぬる、南園  
堂の藤なみや、さかりは夏にかゝりたる、その松が枝のふりもよく  
三笠の山や雲井坂、雨にこえゆくうば玉の、やみの螢の金砂子、  
さをさす舟の佐保川に、風もすいしきすゞの音の、ふるのやしろ  
の神さびて、けがれ心もさる澤の、池にやどれる月のかげ、むか  
しの入のかたみぞと、見るや采女が衣かけし、柳もひと葉ちる秋

秋の日の春日  
詣、心行くこ  
と限りなし、  
せめてこの曲  
にても聞かま  
しく思はるゝ  
也、



の舟をたくみしさへがにのそのふるごとを思ひねの、枕にひ  
 いくとゐるきの、はしふみならずこまのあし、なくやすむしく  
 つは虫、りんきのかほも三輪の里、いこくりかへすたまづさや、  
 板屋にはしる玉あられ、するは雪ともならざらし、さらせる、く、  
 布のしろたへに、たねすたえず、あゆみをはこぶなる、春日の宮  
 のたふさきは、かくともつさじやまごことの葉。

頼光

大江山入り、  
 磯原置など  
 にかこよけ  
 かしるものな

頼光いはほに腰をかけ、是より東はみちもなし、東西をだにわか  
 たねば、何をもちし何をしるべに討つべきが、進退こゝに谷つた

歌は多かるべ  
 なかち山田流  
 の持ちたなれ  
 げとて編入れ

も、假令五年が十年も、鬼神の面を見る迄は、頼光が鞍は此山に  
 さらさんず、かたみよかかたのたまへば、五人の人々詞をそる  
 へ、御誼にや及ぶべき、生國はかはれども、冥途の道に二ツはな  
 し、保昌は上總の國海上の生なり、定光は信濃の國薄氷の生、季  
 武は遠江濱名のうまれ、綱は武蔵の箕田の者、扱て公時は伊豆の  
 國とは申せども、生所もしらぬ宿もなき、山姥が子なれば、丹波  
 一國の山狩をしても、何程の事あらんや、打たて、尤も、勇みす、  
 みし勢は、いかなる天魔厄神も、恐れつびやうを見わたる、見渡  
 せば鳥も通はぬ山姥ひ、老たる山姥たひひとり、あじかに入れし  
 さくぐりの、小笠をわけて歩み来る、こゝろ得ずとは思へども、



頼光不敵の大將にて、いかに山賊、此國の千丈が嶽鬼が窟はいづくなるぞ、聞かまほしとのたまへば、モおそろしき所のお尋ねかな、聞いて用心せんためな、かまへてまよひたまふなよ、あれあれ南にあたつて木ぶかくしげる高根あり、白き雲かと思えたるは、鬼が城よりながれておつる瀧の水、血しほに見ゆる時もあり、その峯のあなたこそ、鬼がいは屋とさくばかり、人倫たゆれば誰ありて、見し人どては候はず、なう客僧と、救へてこそは通りけり、頼光は力を得、さあらば此峯越えやとて、猪猿鳥の聲たわて、のぼれば天に逆のぼるかと思ゆるめさ、くだればないりにおち入るかとも目さまし、十萬里の波たつてはくうのあとをのこし、

二千歳の石橋と成たり、人つかれ氣もたゆみ、高根の雪に枕をそばだて、岩もる水に咽を潤し、枯木をびえて横はり、苦なめらかに露しけき、かつらをたぐり足をつまたで、木の根に取つきとりつき、心をくたさきをもけす、耳にふるものどては、みねにこたふる山査や、言問かはす物どては、しるしと得たる松と杉、木蔭にいざと人々は、息をやすめて立たまふ、芽生ひしげる木蔭を見れば、わかやかなる上臈の、血しほに染まる小袖をもち、ほそ谷川にうちひたし、なみだととも洗ふては、公時見つけて飛んでかゝれば、なうさら／＼變化の者ならず、みやこがたより此ところの、酒吞童子にとらはれて、壺をもしれぬ憂身の中、あこに



のこりし妹も。此ころ連來り、われ等ごとき敷をもしらぬむすめ  
 子を、童子が常のたのしみに、腕をぬき股をそぎ、酒と名づけて  
 血をしぼり、銚子に入れてわれくに、酌をさせての酒もり、けふ  
 は人の酌とれば、あすはわが身もたれ人に、酌とられんこの物お  
 もひ、ふびんや妹もゆふへの寝酒に引さかれ、今のいのちもおぼ  
 つかなく、血をそいで其衣を、せめてきよめんこゝろざし、あ  
 はれみたまへ客僧と、袖にすがりて泣き居たる、頼光も涙ぐみた  
 まむ、ホ、なげきこそことわりなれ、われは勅をかうむりて、鬼  
 神退治に向ふたり、かれが住家に案内あれ、悪鬼をほろぼしかた  
 く、をも都へもくりかへすべしと、のたまへば、ありがたやかた

じけなや、身のかたき世のかたき、道びきいたし申すべし、鬼が  
 城はちかけれど、案内しらねば百日も、おなじ所をめぐるなり、連  
 だちて眷屬ごもに、あやしめられては御大事、わらはが姿を見え  
 がくれにと、ささへたてば目もはなさず、木の間をわけて十町あ  
 まり、ゆくかどすればたちまちに、鬼が城にぞ着たまふ。

田植の幸

里の卵の花や、咲きそめて、山ほとゝぎすの忍び音も、圍の衣の  
 うら懐かしく、短かき夜はのこよもの、花橘のうつり香に、さ  
 ぬく暮ふ後の朝、人目を包む妹がとも、まだ若竹の世心づかね

今一しは筆の  
幸あれかしと  
思ふ



小女がたもと打つれて、小田におりたち足なみも、揃ひの笠にひとへ衣、くれなるにはふ玉だすき、掛まくもいと畏き天皇の、御代明らけく治れる、九年の五月陸奥へ、行幸まします道すがら親しく見そなはせ給ひしは、百姓を仁愛しみ、慰勞まします御心にて、いと有がたきためしにこそ、そもく我大御國は固より百千足國とて、よろづの物のたるが中にも、すべれて稻の生たつより、瑞穂の國とも稱へたり、穂とは息の根といふ事、息ある内が命にて、命を保つ根本也、かく大切の初稻を、神に參らせ玉ふを新嘗會とぞ申すなる、さればいと敬みて、齋種をおろし、苗代に五十串を立て、七五三はへて、水口祭嚴重にせよ、三千五百万

の蒼生が、かゝるたふとき瑞米を、飽くまで食ひ腹つゞみ、内つ御國の早苗草、年ある秋の千五百秋、榮えゆくころめでたけれ、榮えゆくこそめでたけれ。

竹 筏

葉がくれて亥中のかげのふけがてに、面影のこるひとこゑは、夢か戀しやア、こひし鳥ぞ、まつ夜のねやに風さそふ、松のしらべのをのへより、真如の月は西の空、氷は東にこゝまらで、ながれにうかぶ竹筏

子 日 遊

竹筏も西の空  
にや流れ行か



千代のためし  
さ、今も初千  
の野邊に遊ば  
ましや

夏の風情、等  
の未に乗りに  
かよく涼し  
かるべし

◎夏

初春の初子の野邊に皆人の、いざとしいへばもうともに、われも  
ゆき間の小松原、二葉に千代を引そへて、まごめしつゝもさかづ  
きに、くむや霞のそなたなる、岡邊の梅もあたらしき、年の榮に  
を見せがほに、花のひもときをちかたの、一むら竹に鶯の、も  
よろこびはけふよりと、聲たてそめつのどかなる、御代の春とて  
老ぬるも、若きもともにかくしつゝ、心ゆく野をこふが嬉しさ。

夏

あつさゆみ、彌生のそらもたちかはり、春と夏とのかきつばた、  
むらさきもふふなみの、かけてとななるほどさす、ゆかり

の人の寢覺にも、聞くひと聲は夢ならで、枕の上のさつき雨、ふ  
るのなかみちふりし世の、むかしの人の袖の香に、花たちばなの  
風かをる、のきはすいしきゆふ月の、やどれるつゆかとお盛、こ  
がれくでそれかどばかり忘れず、消えぬ思ひのはかなけれ、  
われながら、君を思へばうらみつわびつ、浦島が子の箱なれや、  
あけてくやしきく、なつのみちか夜。

夏の詠

あこがれて、月に名のるか郭公、宵の初音は空にさへ、しのびか  
ねてや言の葉を、よそにもらしてゆふがほの、垣のへだてとなる

とりん、なる  
夏の景物、筆  
の運びもいと  
涼し氣なり、



ならば、後のうさ名りたちばなを、をしむかひなき夏虫の、光を袖につつまれず、ひとりこがるうかひ舟、よるの思ひはかいら火の、まだあけぬまに消えはて、はれぬ心はさみだれの、さみだれの、しづくもかほるあやめ草、ひくもくうれしき君が玉琴、

夏やせ

逢ふことの、絶間がちなかなれど、名だてがましくみな人の羨ましいとすて言葉にも、いはれていとももの思ひ、さけてちらしてまざれて見ても、ころろひとつにせまるやら、しんきくくえ、うかぬすがたをなぶられて、かくすことばも夏やせと、人に

浮名の末がま  
も夏となるべし  
も想なるべし

こたふるなみだ河、ふかいちぎりどわしゆるるに、浮名たゝせる身とならば、今のおもひをわすれ草。

那須野

梟松桂の枝に鳴きつれ、亂菊の花にかくる、野狐のふしど、虫の聲さへわかちなく、をぎふきおくる夜嵐に、いと物すごきけしきかな、野邊の狐火思ひにもゆる、もゆる思ひにこがれていでし玉藻前、萩の下露いとひなく、月にそむけてうらみごと、すぎし雲井にありし時、君が情にいくとせも、比翼の床に鴛鴦の、衾かさねてちぎりしことを、むねにしばしも忘れはやらで、ひとり涙

物すごき那須  
野の原、忽然  
として現はれ  
出でて玉藻の  
前、身の毛も  
よだつやうな  
り、だつやうな  
曲もまたよし



にかこち草、ぬれてしほる、袖の雨、抑われこそは天竺にて、班  
 足太子のつかのかみ、中華にては褒姒とよばれ、日の本にては鳥  
 羽の帝に宮仕へ、玉藻前となりたるなり、清涼殿の御遊の時、月  
 まだ出でぬ宵のそら、いさごふきこし風もつれ、ともし火消れし  
 その時に、我身より光をはなちててらすにぞ、さみは御腦となり  
 たまふ、桐のひと葉に秋たちて、昨日にかはるあすか川、今のう  
 き世をかくれがさ、みやこをあとに見なしつゝ、せきのしら河よ  
 そになし、那須野の原にすみなれて、つひに矢先にはかなくも、  
 かゝるこの身ぞつらかりき、殺生石と世の人に、疎まることゝな  
 りはてし、なみだのあられをさすゝき、ふりみだしたるありさま

に、消えてはかなくなりけり。

白の聲

春夏秋冬と経  
 來つた年の暮  
 の白の聲、の  
 の拍子も面白  
 く、世を渡らば

おぼる夜の、かげに霞のうすものに、こぼれてにほふ梅が香の、  
 日敷にうつる春くれて、夏立つけふのうす衣、うす紫のあふちか  
 げ、涼しき風に秋のたつ、うす霧なびく初尾花、ほのかにうすく  
 暮そめて、みすこす高き山風に、月すむ秋の琴のこゑ、夜寒の雁  
 も音をそへて、外面の木々のうすもみぢ、いそぐしぐれの朝戸出  
 に、庭のうす雪めづらしな、なげの情の筆の跡、墨うすからぬ玉  
 づさに、契りは何かうすからん、うすきへだての賤が家に、稻つ



くうすの槌の歌、拍子も風に通ひきて、うたふ聲々面しろや。

八重垣

春たつや、かどは松江のわかみどり、雲井なゝめにしらなみの、  
なぎさによする荒乳山、ひかりのとけき日の岬、その籬の河のな  
がれくむ、鰐の淵せのみてらまで、ぬかづきすぐる草まくら、ぬ  
ふてふよりも聲にほふ、うめの花笠ひよりがさ、さくらは物を思  
はする、あさな／＼のみねの白雲、浦はにしきの干潟のかひ、名  
にいろ／＼をよびたて、いそなつむてふしづの女の、つばをり  
ならぬ葎がらげ、しどけなりふりよ、その十六のしまを舟、のり

八重垣つくる  
出雲の名所、  
目のあたり見  
るやう覺ゆ、  
めでたき調べ  
にこそ、

さるわざもしなれてなれて、さても水馴のやるせなき、浪のあら  
めや打よする、よその見るめも何よしあしの、サヨへ、闇をぬひ  
くどぶ蝿、袖師が浦のもやうごり、ほんにくしほらしや、そ  
めいろ／＼の鳶もみぢ、手間の關山ついうちこえて、サヨへ、月  
と夜ごろにこがくれの、つまにこがるゝさをしかの、ほんにく  
しほらしや、秋もくれ、わか河原の我おもひ、ねんをむすぶの  
みやしろへ、あゆみをはこび、かねてねがひのひとすぢを、つひ  
うちもけて、いふて見よかいな、人めを土師のかたざとや、こひ  
わたるらん佐多の浦、雪の笹屋に友よぶ千鳥、ちりやちりちりち  
りかゝる、ふいさを花のおもしろや、かりのやどりを指をれば、



はるくさぬる道しるべ、見かへるうらの八雲立、出雲八重がき  
つまごめに、八重つくる、その八重がきを、まもるやかみのくに  
すぐに、いく十かへりの春やまつらん、春を待ちぬる。

山ざくら

のどかなる春のころにさそはれて、花のしたひもうちとくる、  
ちぎりやきのふけふはまた、思はぬかたの山風のふくにまかす  
る花の枝、それもうきよの習ひちやものを、ころよはさをさが  
にして、あだなる花と兎もすれば、たつなはづかし山ざくら。

まがきの菊

われはこの山  
櫻を愛す、讀  
むだにそゝる  
春心地する、  
よき歌なり、

色とりんぐの  
まがきの菊、  
うるさきまで  
に言葉の花を  
かへてける

庭のまがきに植おける、菊の花こそ咲きにけれ、いごめづらしの  
色香よな、春のあしたのさくら花、秋のゆふべのちみち葉を、よ  
うになしてはをかしたるも、あはれもこれにとちむらん、まごごや  
雲井の御庭には、天津星かどあやまたるゝも、これ此花のさちな  
らむ、さればめでたき菊の名の、あまたはあれど八千種の、にし  
きの中のまき草、露おさそはる百夜草、その長月の長かれと、  
限りなきよをちぎり草、をとめ草てふ名もしるく、里の少女のさ  
しかざし、あゆめば袖も匂ふなる、草のあるじの翁草、うつろふ  
色のむらさきも、なほめづらしき霜見草、花のとちめとさくから  
に、くもり花とやいふならん、實に真さかりの秋の園、たかきい



やしき中垣の、へたても見えすしら菊の、花には露の光りさへ、  
清らをそへて秋ごとの、友と千年をちぎらばや、御代をやり代と  
契らばや。

稀のことぶき

めでたき歌と  
して置かん、  
さあれ願から  
してあれ願から  
してあれ願から

菅の根の長さおもひもけふこそは、松が枝ありて隔てなき、恵に  
茂る竹垣の、みどり木高く年ふりし、梅もも、枝や、若枝さし、  
汀の池にすむ龜の、よはひも久しく萬代に、古來稀なる壽を、濱  
のまさごの數々に、くらべて君をまな鶴の、綾羽重ねて紅の、頂  
深み御園生は、蓬が島とおよびなき、かけ相生にそなれつゝ、榮

ねさかふるためしかや。

まつかぜ

久方の月のかつらの影たかく、風吹おくり、まさごしほ、みがき  
なしたる光りをば、ひるかどばかり見渡せば、花も紅葉もなかり  
けり、浦の苦屋に秋ふけて、うちもねられずあま人は、しほなれ  
衣袖さむみ、さぬたの音もうらみなり、十布の菅菰みふにねし、  
ひかし惚べばわりづめの、わりなき中も中々に、何うらつりのうら  
み事、袖はなみだのなみがへし、かへるたもとを引れんに、秋の  
夜長し長かれど、なごりは盡さぬつくし琴、うみとよぶなりゆか

秋の夜の  
しるき、露出  
して、盡くる所  
なく、等唄ら  
しめて、よし、  
吾嬭等譜第二  
編中に見るべ  
きもの、つあ  
の歌、つあ



りなる、磯邊の松を吹く風も、おのづからなるしらべには、雲井の雁も琴柱して、落つるまに／＼聲そへて、心をすます浪の音、秋風樂やこれならん、おもしろや松風の、しらべそへたる當萬琴八千代のためしに引糸の、ながきよかけてつさせじと、八百萬代も三笠山、君がめぐみやあふぐらん。

松の壽

兎に角めでたき詞句を撰集めたるものか  
な、思切つた  
愚歌也

六つの花なほ十返りに一とせを、むかへ目出度き御代の春、わか葉にかへるこよみこそ、いくよ經ぬらんしをりかな、かしこき文のあさらけく、ひらけすゝむや四ツの海、なみのつゞみのざらん

ぎに、たのしくすめるくにたみの、わきて操のまつのもと、つたなきわぎの糸竹も、ときはかきはの君たちの、ひくて恵にはもしげる、山のえがほにのこんの雪の、ほんのりと中にいろどる紅梅は、かわゆらしいぢやないかいな、をさな心の春あそび、はづんでまりの、一イニウ三、三ツのあさがすみ、かのも此もにつくはごの子に、あをいて三ヶ月の、てりかつらのきみのおとしはいくつ、ここのねかよふ糸の曲、げに此曲のおもしろや、なほくれたけの千代八千代、ちぎり久しき松のことぶき。

芙蓉峯



その姿、その心、齒より抜  
出でたらんや  
うなり、

◎芙蓉葉

ましろなる、高根も春はさくら花、さくや姫とは神代のむかし、  
かみ代も花の色ざかり、花のすがたのいとしらし、しんぞいとし  
らし、いともかしこき人の世に、ふしもすぐなる竹取の、翁のむ  
すめはよいむすめ、みがきたてたるかつらの眉に、かほとりそ  
ふ秋の夜の、月にかこちて故郷を、こひしがるやつしたふやつ、  
やつとやつとを指をり見れば、二八十六でふみたまづさを、雁が  
持て来る雲井より、ちらと見せたは冬たつそらに、ふりくる雪の  
肌自慢、これ見よがしにみほの松、はごろもといふ謎かけた、あ  
まつをとめは浮氣があだか、をとこひでりやこのとしつきを、し  
づがふせ屋にかりまくら、絲も繰候はたをり、  
霞裳羽衣の

曲をなし、あづま遊びの駿河舞、雨にうるほふ花の袖、かへすた  
もとに充滿の、たからをあまねくよにふらせ、ほどこしたまふい  
つくしみ、つきぬそのなど蓬萊の、やまゝたこゝにふじのねの、  
あふぎのすその末ひろき、みくにのかなめを祝しけり。

小督曲

芝居氣の作者  
太平記の作者  
此材料を散  
して今も散  
秋の値を散  
の一段をあ  
此の一段を  
て、一段を  
箏の音に  
たる心地す

小鹿鳴く、この山里と詠じけん、嵯峨野あたりの秋の頃、千草の  
花もさまじく、虫の恨も深き夜の、月にまつ虫招くは尾花、萩  
には露の玉虫や、そよぐをぎ虫樹虫、鳴くねにつれて仲國が、寮  
の御馬賜はりて、宿直姿のふち袴、尋ぬる人の面影に、立つ薄霧

◎小督曲



の女郎花、それかあらぬか幻の、蓬が島ね尋ねわび、駒引き留む  
 る笹のくま、やすらふ蔭の松風に、通ふ爪音つま戀の、音に寄る  
 鹿にあらねども、昔おぼゆる笛竹や、合す調のまがひなき、聲を  
 しるべに慕ひ寄る、嵯峨野の奥の片折戸、想夫戀の唱歌は、比翼  
 の翅の雲井を戀ひ、盤渉調の調は、松の連理の枝に通ふ、小督の  
 局世を忍ぶ、住家も翌は大原に、變へん姿の名残とて、夜半に手  
 ならずつま琴の、岩越す思せきかねて、涙に袖をかしはれや、人  
 目もいかいあやめがた、糸の色音をしるべにて、まし入る月の雲  
 井より、御使に参りしと、かしこき君がみことのり、野邊の遠方  
 分け來つゝ、露の玉章さしよする、妻戸の端の縁の綱、又引き結

ぶ御返言、添へて賜はる五つ衣、後朝送るほどもなく、迎ひの車  
 奉り、昔にかへる百磯城や、むかしにかへる百しきや、千代を契  
 りの松の言の葉。

こゝろの奥

四季さまぐのその中に、夏は卯の花しろたへの、雪かどばかり  
 よをふかみ、まなびのまどにむすぶ夢、さめてすゞしき衣手に、  
 かをりもたかきたきものも、くみあはせたるむつの國、それはこ  
 どぐさこれはまた、十二にわかる糸の音の、そのなかばなる双調  
 の、いまこのときにあふぎもよしや、よしあしと、なはかはれど

背葉しげれる  
 夏の奥ふかく  
 の奥ふかくた  
 どの奥ふかく  
 心の緒に觸  
 れるもうれし



も、たゞ一すぢにこひく、こひしきとりをまつち山、まつら  
 ん友にあひ見んか、たまさかにあふとも、なほぬれまさるたも  
 と、は、ふるさこばにあり明の、月がないたかひと聲は、雲井  
 のうちにゆかしくも、あとに千聲やふくむらん、やゝひろく、み  
 ちはさかふてくさく、の、しげるがうへにおく露の、こぼれてす  
 るはながれなす、水に心うつせり。

壽くらへ

由來壽など、  
 ことばはる歌に  
 縁なしのなし  
 「くらへ」とあ

壽はしゆんざんにして千歳ひいで、又そう海のかぎりなき、南の  
 星の影ひたす、岩根の波の名に高さ、天の橋立ふみも見す、みづ

るなど舞いと  
 深し、浦島  
 と題をすれば  
 よかりさうな  
 もの也、

のえといふみやびをあり、月雲花のをりくに、都の手ふりうと  
 からず、心もかろき春風に、釣棹とつて青柳の、糸くり出す一葉  
 舟、かつをつり鯛つりはこり七日迄、家路わすれて、住の江や、  
 浦和はるかにこぎ出でぬ、あゝいぶかしやまさしく釣しは龜なる  
 を、いとやんごとなき上講の、をればこぼるゝねみの露、初花櫻  
 に鶯の、初音そへたるばかりなり、我はそもたつの都のものなる  
 が、君をともなひ申さん、いざもろともにと浦島は、とこよの國  
 にいたりけり、わたつみの、わたつみの、神の宮居のうちのへの  
 妙なるうちにいつ迄も、思ひなきさにうちつれて、貝やひろはん  
 玉やひろはん、君がえにしはむらさきの、深き色貝千種貝、たま



のあふせはなゝわだに、思ひとほした女氣は、風にみだれぬ玉簾、  
 簾貝とのへだてはうしと、くねる目もとのしほ貝は、なでしこ貝  
 のしぎけなく、物思ふとは白玉の、何ぞと露のあだことば、つい  
 口玉にかけられて、手枕ふれし朝寐髪、たのしき中なかにふるさとを  
 かつしのばれてたちかへる、をとめがあたへし玉くしげ、明ての  
 とけきささらぎの、花のむしろにまどゐして、暮くらへ千代くら  
 へ、山にくらへて此の君の、高さよはひを祝しけり、

江島曲

文字を見しの  
 春すぎて、今ぞはじめの夏衣、軽きたもとがうら風に、科戸の順

みにて、江の  
 島の春の干潟  
 くに貝拾ふ如  
 き心地す

風そよ／＼と、福壽圓滿かぎりなき、ちかひのうみもそれならで  
 干潟となればいとやすく、あゆみをはこぶ江の島の、繪にもおよ  
 ばぬながめかな、水は山の影をふくみ、山は水のこころにまかす  
 神仙の巖屋、名に聞えたる蓬莱洞、聳ついはね峨々として、隨縁  
 真如のなみの聲、心もすめるをりからに、蟹の子どもの打むれて  
 磯馴小唄も貝づくし、君がすがたを見そめてそめて、ひく袖貝を  
 ふりはらふ、こちらは鮑の片思ひ、あだしあだ浪さくら貝、梅の花  
 がいその身はすゐな、すゐなすがいはをどこの心、こちらはひめが  
 ひ一すぢな、女ごころはさうぢやないわいな、いつかあふ瀬のと  
 こぶしに、あふてはなれぬ蛤の、その月日がひまてがひと、いふ



をたのみのいもせがひ、うたふひとふし戀のうみ、かのふかざは  
 の悪龍も、たへなる天女の神徳に、たちまち一念發起して、なが  
 くちかひをたつのくち、むかしのあとをとめける、いく千代も  
 つさせじつまじこの島の、いそ山松をふくかせ、いはねによする  
 浪までも、さながら夏風樂青海波を奏すなり、こごはりなれや名  
 にし負ふ、妙音菩薩のしらべのいと、ながくつたへて、富貴自在  
 壽命長久繁榮を、まもらせたまふ御神の、ひろさめぐみぞあり  
 がたき、ひろさめぐみぞありがたき。

天長節

限りなきめで  
 たき日を歌ふ  
 には、今一し  
 には、すべし  
 となり、頌才  
 新詩的散文の  
 多く筆の曲の  
 つきしよと思  
 はる、

三大節のいはひのなかにも、日出度くたふときは三千餘萬の兄弟  
 に、わが父母と慕はれて、三千餘萬のはらからを、我子とおぼし  
 いつくしむ、すめらみことのあれませる、天長節のけふぞかし、  
 あまつひつぎの御さかえは、天地とともにかはらねど、そらゆく  
 月の雲霧にかくれしごとく、武士の手におちたりしまつりごとく、  
 もとにかへりて檣原の、聖の御代の古へに、たちまさりてぞさか  
 えける、大御心の八千綱に、ひきよせられて鹽沫の、こりたる國  
 の國人も、そなりのごとく行かよひ、醫術法律農や商、よろづの  
 わざもひらけつ、海には汽船陸に汽車、あるがなかにも國護る  
 おほぶねこぶねうけならべ、大砲小銃とりそなへ、いまぞまこと



にくはしはこ、ちたるの國と稱ふべし。家にまなばぬ子らもなく  
 邑に學ばぬいへもなし、電線かゝらぬ國もなく、郵便かよはぬ里  
 もなし、瓦斯のともし火かすくに、よみ盡されぬ御勳功は、不  
 盡の山よりなほ高く、伊勢の海より猶深し、朝日のみ旗門ごとに  
 立て、あふげやみめぐみを、菊の盃とりくに、酌みていはへや  
 君が代を。

葵

上

恐ろしきは人  
 恐ろしきは人  
 の顔、恐ろし  
 きは人の心、

三の車に法の道、火宅のうちをや出ぬらん、夕顔のやどの破車、  
 やる方なきこそ悲しけれ、うき世はうしのをぐるまの、めぐるや

葵の上、散る置く  
 果敢なき世の  
 中に、怨むまの  
 じきよ人、怨ま  
 まるまじきよ  
 人、琴の音の  
 絶えぬ如きこ  
 の恨み、此曲  
 の妙、此曲の  
 佳相、俣つて  
 勝を断つて

むくひなるらむ、めぐるやむくひなるらむ、おほよそ輪廻はくる  
 まの輪のごとく、六趣四生を出やらず、人間の不定、芭蕉泡沫の  
 世のならひ、さのふの花はけふの夢と、おどろかぬこそおろかな  
 れ、身のうきに、人のうらみの猶そへて、忘れもやらぬわが思ひ  
 せめてやしはしなぐさむと、梓の弓に怨靈の、これまであらはれ  
 出たるなり、あらはづかしや今とても、しのびくるまのわが姿  
 月をばながめあかすとも、月には見ねじかげろふの、あづさの弓  
 のうらはづに、立よりうきをかたらむ、あづさの弓のおとはいづく  
 ぞ、あづまやの裳屋のつまどにゐたれども、すがたなければとふ  
 人もなし、ふしぎやな、誰とも見えぬ上誦の、やぶれ車に召され

◎奏上

六五



たるに、青女房あおにようぼうもおぼしき人の、牛うしもなき車くるまの轅うしろにとりつき、  
さめくとなきたまふいたはしきよ、もしかやうの人ひとにてもや候まかり  
はん、おほかたは推量すいりやう申して候、たい包つつます名なを御おんなのり候へ、  
それ娑婆しあは電光でんくわうの堺さかいには、うらむべき人もなく、かなしむべき身みも  
あらざるに、いつまでうかれそめつらん、たい今いまあづさの弓ゆみのお  
とにひかれてあらはれ出いでたるをば、いかなるものこのおぼしめす  
これは六條むつじょうの御息所みやすどころの怨靈おんりやうなり、われ世よにありし昔いにしへは、雲上うんじやうの花はな  
の宴えん、春はるのあしたの御遊みあそびに馴なれ、仙洞せんどうのもみちの秋あきの夜よは、月つき  
たはふれ色香いろかにそみ、花はなやかなりし身みなれども、おどろへぬれば  
朝顔あさがおの、日蔭ひかげまつまの有様ありさまなり、たいいつとなきわが心こころものう

き野のへの早蕨さむらじの、萌出もえいでそめし思おもひの露つゆ、かゝるうらみを晴はらさん  
とて、これまであらはれ出いでたるなり、思おもひしらすや世よの中なかの、な  
さけは他ひとの爲ためならず、われ人ひとのためつらければ、かならず身みにも  
むくふなり、何をなげくぞくすの葉はの、うらみは更さらにつきすまじ  
あらうらめしや、今いまはうたではかなひ候まかりふまじ、あらあさましや  
六條むつじょうの、御息所みやすどころほどの御身おんみにて、うはなりうちの御おんふるまひ、い  
かでさる事ことの候まかりふべき、たいおぼしめしとまりたまへ、いや、い  
かにいふとも、今いまはうたでは叶たまふまじと、まくらに立たちよりちやう  
どうてば、此迄こゝまではとて立たちよりて、わらはるあとにてくを見みする、  
今いまのうらみはありしむくひ、嗔恚しんいのはむらは身をみこがす、思おもひし



らずや思ひしれ、うらめしのころや、あらうらめしのころや  
 人のうらみの深くして、うさねになかせたまふとも、いきてこの  
 世にましまさば、水暗き澤邊の燈の影よりも、ひかる君とぞちぎ  
 らん、わらはよもぎふの、もとあらざりし身となりて、葉する  
 のつゆと消えもせば、それさへことにうらめしや、夢にだに、か  
 へらんものをわがちざり、むかしがたりとなりぬれば、なほもお  
 もひは増かゝみ、その俤のはづかしや、枕にたてるやれぐるま、  
 うらのせかくれゆかうよ、打のせかくれ行かうよ。

あづまの花

あづまの花の歌  
 とりたてし歌  
 ふべきふし  
 なげれど、し  
 枝は手折り  
 からぬにもあ

よしのよく見し人はいざ、花はあづまのすみだ河、世ににぬ春の  
 ひかりぞや、みやことりにことゝひし、むかしには似ずわたし守  
 春は暇無く水馴棹、さして堤そゆきかよふ、人の袂のあけみどり  
 柳のもとにひかれきて、ながき日暮し花のかほ、袖にしめてはく  
 みかはし、あそび戯れつたをやめの、うたふひとふし夢ならば、  
 のこらじ袖のうつり香を、いかにさだめむ咲にはふ、花のたま  
 ら夢ならで、かはすもあだの花のかげ、さすがうれしきかをりに  
 も、むらさきおふるむさし野の、ひろきめぐみやあふぐらん、な  
 ほゆく末も千代やちよ、ながきつゝみの花ざくら、さかえさかえ  
 む御代の春。



あやめ草

このあやめ草は、前後のついでにはなくもかな

玉くしげ、みちの榮をかけまくも、かしこき御代にすむ水の、めぐみにしげるあやめ草、いつのさつきにひきそめて、賤が袖さへにほふなる、露の朝日のかげ清く、さながらかさしの玉なれや、みどりの末葉うちなびき、そよとゆかりもなつかしなから、かすしらぬ身のやるせなや、めならぶ人のあまたとは、夫も雫のたねかいな、しきたへのまくらにかよふ月かげに、おなじにはひの小夜風も、なにかあやめの長き根は、幾千代かけて軒にふくらん。

あけがらす

茲に至りて明鳥も、阿呆々々とも鳴くが能べし、

待くらし、そしてうらみしその夜半は、おそい來やうと一言が、つい云ひつゝのるなかくに、ないてゐるのを笑ふかと、そむけた脊中打たゝき、男ごゝるのにくいのも、うれしひことごとにかくに、涙がささの宿となる、をなごの癖ぢやないかいな、とにかくに涙が先のよはい氣を、剛う見せたりしなふたり、うき河竹の流れの身、せめてくめかし明鳥

相生

相生の松のいもせの契りに、歌といもしいとめでたしい

われ見ても、ひさしくなりぬ住よしの、松のふたもごしげりあひ連理の枝をうちかはし、いもせの道は今とても、通ふ夜ごとのか



さのうへ、とほほとゞぎす鳴さつる、みじかき夏のあけちかきをのへのかねぞ告げわたる、またごかはせし仲のいつまで。

西行

法師の名歌を  
合せて、其の  
面白く、人々  
演ずるが如  
し、野暮な世  
界に、やせら  
るゝ、雅言俗  
詞、これこそ  
本編第一の作

われも昔はますらをの、真弓つきゆみ年を経て、引きたがへたる朝ゆふは、命なりけりたびごろも、苦のころもに身を染めかへて心のちりのそではらふ、野暮な世界に愛し子の、いとし可愛は昔の事よのよしの山、去年の技折のみちかへて、また見ぬ花のいろくを、たづねて歌まくら、筆のすさびの墨染櫻、うつらふ春の花のかほ、やせる姿に笠着たなりを、水のかほみに影とめて

しばしたちよる柳かげ。

櫻がり

琴柱の雁に花  
のちりかいる  
風情あり、心  
うら立つ歌の  
しらべ哉

のどかなる、頃もささらぎおしなべて、見渡す山も打けぶり、柳の糸の浅みどり、花のにしきかあやなくも、都に知らぬ、しら雲の、たてちやしるべ櫻がり、人の心のあこがるゝ、空を見すてゝ、越路には、待つらむものをゆく雁の、かはるゝ、つばさは雲にきえ、聲あはれに聞ゆなり、行方慕ひて立どまり、なごりはしばし別れねど、はつ花ぐるまめぐるひの、轆つらねて見ずもあらず見もせぬ人や花のもと、知るも知らぬも花の蔭、あひやどりして



すがの根の、長さ春日もいたづらに、ひかすすこして花ごろも、  
なれし袂の香にうみて、野べも山べも花故に、いたらてぬくまは  
なけれども、山の、やまの、いはねをとめておつる、千すぢ百筋  
佐保姫の、手びきの糸のたきなくば、たをりてゆかん入相の、鐘  
よりさきに春がすみ、たちなかくそ風は吹くとも。

さみだれ

五月雨の、長  
を引く身ぞ、

なよ竹の、夜の間の夢のみちかきに、ながくしくもくりかへす  
軒のいと水いといしく、まさのいたごのあけ暮に、しめり勝なる  
闇のうち、うつらくとうた、寐の、枕にとほき時鳥、雲間ほの

かにしのぶ音も、ゆかしやまゝにならぬ身の、うき数まさる夏草  
の、かねをばように聞せて、またたき残るかやり火の、もゆる  
ばかりの物思ひ、はるゝ間のなき夜半のさみだれ、

紀の路の奥四季の段

山寺の、春の夕ぐれ来て見れば、入相の鐘に花ぞちりける、散れ  
ばこそ、いとゞ櫻はめでたけれ、よしやちらでもあだし世と、花  
によそへし口號み、それをてほんに鶯の、うたをうたへば琴ひく  
鳥の、聲にあはせんつらみ草、チ、チツチ、タンポ、手をつく  
ぐし、つばすみれ、つゝじ山吹いろくの、花もいつしかなつ

いづれの、劣らぬ  
四季の、眺、筆の  
兼ぬる、と、筆の  
筆の、音に、ふれし  
て、紀の、路の、奥  
に入、る、心、地、を  
ん、



山の、青葉をわけて初音めづらし、ほととぎす。雲井のよそに戀慕ふ、身は卵の花のしらむまで、寐すに待つのをなぶりにくるかまきの板戸をほとくと、たゞく水鶏のたましくさつたか、しんづつらにくや、憎い可愛のむつ言を、誰にもらして名はたちばなの、かほりほのめくうす衣、袂すらしき秋風に、招くすゝきは若むらさきの、萩に添ふとてこぼるゝ露の、つゆのよすがをしのびね、松むしすいむし、さりざりす、さりはたりてふさりのまを、わけこえきつる初かりの、つばさにかけておくるふみ、見よかしみよかしもみぢばも、いろのもなかの時雨にぬれて、たつたの川にながれの身、戀ぢやせくまいうき世はくるま、めぐる月日もふ

るやふるく、雪もしもゝあられも、まえてたまられぬ、諸行無常のことわりを、つげてやかねも響くらむ。

曲 水

さかづきを、かすかく水に流しては、思ひくのうたのさま、ころのうちといはぬ戀、ゆかしき人は山吹の、かきのおくなるあげ部、花のかんばせすきびたひ、ねむれるすがた海棠の、夢か現か忘られぬ、こき紫の藤の花、さむるといふは色ならで、さけの手まくらよひながら、おぼる月夜の影うすく、ほしも三つ四つひかる君、つまに巳の日はらひして、こゝろも頃も、はるゝ春雨の

水の上うく盃  
心の底に洗  
む方もあらん



熊野

花を見捨て、  
踏る、それば、  
路、わかれ、  
妻、さあ、  
ひ、は、と、  
る、し、と、  
盛、り、な、  
花、の、命、  
熊、野、の、  
あ、は、れ、  
深、し、  
得、

花前に蝶舞ふ、紛々たる雪、柳上に鶯飛ぶ、片々たる金、花は流  
水に随つて、香の來ること疾し、鐘は寒雲を隔て、聲の至るこ  
と遅し、清水寺のかねのこゑ、祇園精舎をあらはし、諸行無常の  
聲やらん、地主権現の花のいろ、娑羅双樹のことはりなり、生者  
必滅の世の習ひ、げにためしあるよそほひ、ほとけももとは捨て  
し世の、なかば、雲に上見えぬ、わしのお山の名をのこす、寺は  
かつらの橋ばしら、立出てみねの雲、花やあらぬ初ざくらの、ざ  
をん林、下河原、南をはるかにながむれば、大悲應護のうす霞

熊野権現のうつります、御名もおなじ今ぐまの、いなりの山の薄  
もみちの、あをかりし葉の秋また、花の春は、清水のたいたのため  
たのもしき春も千々の、花ざかり、山の名の音あらしに、花のゆ  
き、深きなさを人や知る、わらは御酌に参り候ふべし、いかに  
熊野ひとさし舞ひ候へ、ふかきなさを人や知る、なうくには  
かに村雨のして、花を散らし候ふはいかに、げに只今の村雨に、  
花の散、候ふよ、あら心なのむらさめやな、春雨の降るは涙か、  
ふるはなみだの桜花、ちるををしまぬ人やある、よし有げなるこ  
とばのたね、とりあげ見ればいかにせん、みやこの春も惜しけれ  
ど、なれしあづまの花やちるらん、げにごうりなり、あはれなり



はや／＼いとまごらするが、あづまに下り候へ、ナニ御いとまご候ふや、なかくのこと、疾く／＼下りたまふべし、あらうれしや、たふとやな、これ観音の御利生なり、これまでなりや、うれしやなく、かくてみやこにおともせば、又もや御意のかはるべき、たゞ此のまゝにおいとまご、ゆふづけのとりがなく、あづま路さしてゆく路の、やがて休らふ、逢坂の、關のとざしもこころして、あけ行くあとの山見えて、花を見すつるかりがねの、それはこしぢ、われはまた、あづまにかへる名ごりかな／＼。

弓八幡

筆の運びもめでたく歌に  
し氣ありてよ

逢見ての後の  
心比ぶれば  
實に昔は  
ふに昔は  
値はあつた  
と見ゆるもの

松たかき、枝もつらなるはどのみね、くもらぬ御代は、ひさかたの、月のかつらのをとこ山、げにもさやけまかげにきて、君ばんせいと祈るなる、神に歩みを運ぶなり、／＼。

めぐり逢瀬

つましあれば、きつゝなれにし戀衣、かさなるなかにひとつみのこたちのきぬはむつきより、わかれ／＼のうらおもて、うすきひとへのなつかしなから、こんな辛苦なつらさ思へば、あはぬもましかと、いふもうきよちやえ、めぐりあふせは賤機帯の、とくにさかれぬ我が思、さゆへとかれぬわがおもひ、いつか晴れゆくこ



ろも春雨。

御旗の勳功

時流に投ぜんとて、かいたる  
歌を運びたる  
八雲琴に義太  
夫を語りせる  
如し、琵琶の  
島の歌なるべ

元弘のむかしとかや、兵部卿の宮と申奉る皇子、北條の高時を  
うたんとおぼしたまひけるに、皇軍利あらず、村上の義光、赤松  
のなにがしを従へて、十津川さして落させ給ふ、折からまたも襲  
ひ奉るとの聞えあれば、吉野にとおぼす道すがら、いもせの莊司  
といふもの、みさきをさへぎりけり、宮おどろかさせたまひて、  
何ぞこのたまへば、熊野の別當のおふけなくも、宮を鎌倉に送り  
まゐらせんの心なり、我ひとりよそに見奉りなば、後のおそれあ

り、かしこけれども近きにさふらへる人、左なくば錦のみはたを  
だにと乞ひまつれば、すべなくみはたを渡したまひけり、折しも  
村上よしてゐるが、何條さることあるべきと、たいちにみはたをど  
り返しつ、かくて宮はやう／＼落させて、吉野に籠り給へども、  
大軍いみじうかこめば、城のつはものたちまちに、残るはわづか  
に成にけり、宮もみづからつるぎをとり、み心たけくおはせども  
御身の程をおぼつかなき、折しも義光かしこになつかひ、身には  
千すぢの箭をおひたれど、變る色なく御まへに、かしこまりて奏  
するやう、とく／＼此所をのがれ給へ、敵もし知らばいかにせん  
おのれひとりとゞまらん、かしこかれども着させたる、錦のおほ



◎御旗の勳功

んひたゝれに、おほんよろひを給はらん、尊き御名をもかさせ給へど、心さだめて乞ひまつれば、宮は御涙をばらひながらに給はせけり、義光うれしと伏おがみ、城のやぐらにはせのぼり、はるか  
 に御蔭を見送りて、よせての方をうちみつゝ、我こそは今上三の皇子なれ、汝等いかで天のごがめをまぬがれん、いでや手並を見せんすぞ、かゝみにせよごなのれるは、實にいさぎよく見むにけり、今をさる五百年あまり、其みよし野の山ざくら花、あらしのあともかぐばしき、よしてゐるがいさをしは、すゝみ行く世のをしへの庭、うなゐらもみな口ずさび、かたりつぐこそめでたけれ、いひつぎゆくこそたふさけれ。

小學生向の唱  
 歌の如し、  
 ルカ、  
 歌とも見るべし

皇國の榮

天地のあらんかぎり、月日のてらさんかぎり、敷島の倭の國はうごきなく、たい一すぢに神代より、すみわたりつゝ五十鈴川、ながれたえせずかしこしと、人々たゞへ徳しと、人々あふぎ日の木  
 の、みいづは實にもありがたき、君は千代ませ、八千代ませ、やちよの後もかぎりなき、榮ゆく御代こそ久しけれ。

忍ぶ草

いつとても、秋としいへば物ごとくに、あはれうちこそひ老が身は、

眞頼博士式長  
 唄、  
 唄はれぬ



へしあつさる  
 わきて淋しも庭の面の、萩の葉風の音のみか、まがきの虫のなく  
 こゑも、夜寒おぼへてことさらに、さびしかりけり其こゑは、枕  
 にひいさその音は、身にしみわたり久かたの、空をあふげばくも  
 りなき、月のかいみにこしかたの、むかしの御代もこゝろから、  
 うつるが如くうれしくも、かつ悲しくも思はれて、袖こそぬるれ  
 いづかたの、民のかまども朝餉たく、けぶり立そひ世の中は、ゆた  
 けく見えて我君の、戸さゝぬ御代と仰ぎつる、其嬉しきに引かへ  
 て、秋はさびしも吹風に、櫻の古葉さそはれて、散りみだれつゝ  
 日にそへて、霜置初むる木々の葉の、もみづる見ても草の葉の、  
 かれ行見ても老はまづ、涙こぼれつとにかくに、おもふ友とちう

ちつとひ、こと葉の花をめぐる外なし。

四季の艶

春がすみ、むらさきたちし曙の、梅に木づたふとりのねも、いつ  
 しかふけてうの花の、ころもやうすき舟人の、こぎ行く方はすみ  
 だ河、ありやなしやのよひの月、をばなの風は君まねく、浅き契  
 は棚機の、さゝのひとよのかりまくら、おもひはつもる雪の朝、  
 簾撥ぐるわかれには、もすそひかへて三輪ならぬ、その苧環の糸  
 による戀。

新

雪



哥澤式の唄な

雪の名どころ多かる中に、富士は上なき思ひのたけの戀衣、うら  
みつ泣いつむつごとの、そして歸したひらの暮 又まつ宵のかね  
のこゑ、なるとならぬが間夫と客、その卵の花の垣根かな、おも  
しろい物がふります居つゞけに、こゝも越路の名にたちし、北國  
なまりばからしい、あんまりざんす有明の、月と見るまでよしの  
ゝ里に、是は吉原よしやよの中。

清華園

園の眺、類な  
かるべし、

夏すぎて、秋もなかかとなるまゝに、今や今戸の岸をうつ、浪の  
音さへ涼しくて、待乳の山の松かせも、千どせをよばふこゑすな

り、七草の花見んとてか、老も若きもとめごも、まだ染あへぬ  
紅葉の、錦の袖やあやのきぬ、よそひて渡る枕ばし、こゝやかし  
ことみめぐりの、やしろをめぐりたづさへし、ひさこの酒をくみ  
かはし、たはふれゆくもおもしろや、秋葉のもりのあきもせで、  
君を八千代とうたひつゝ、むかふつゝみをゆき送り、あそぶさま  
こそをかしけれ、いざ言問はん都鳥、わがおもふ人のそれならで  
さかまほしきは月の出る、かたはいづこそ白髭の、知らば教へよ  
舟うけて、ながすのあしへ棹さゝむ、はるかにあをぐにし山に、  
かゝるむら雲はれわたり、目ざましさまで富士の根の、見ゆるぞ  
まことこゝちよき、かへりみすれば筑波根の、かのもこのものふ



かみどり、そらに聳えてあらはれぬ、五百騎あたりたつ雲は、かはらやくらんしはざとは、おもへどもしほたくあまの、けぶりと見えてけしきよし、かゝるながめをわかものに、清華の園とよびなして、うき世をよそにすみだ河、かつしかを、田になく鶴と聲よびかはし、千代やへなましく。

住

吉

もろ人の歩を  
運ぶ住よしの  
神に願ひの無  
し、多かるべ

一千年のいろとゆきのうちに、ふかさねがひもけふこそは、はるくきぬる旅ごろも、ひもうららかに四方のそら、かすみにけりなきのふまで、なみ間に見えし淡路しま、あをさがはらも思ひや

る、げにひろまへの清々し、かたそぎのゆきあひのしもの、いかへり、ちざりやむすぶすみよしの、松の思はんことはを、わが身にはづる敷島の、みちをまもりの神なれば、四季のながめそのうへに、戀はことさら難題がちに、よめたやうでもよみおほされず、てどはちかひにこゝろをつくし、たかおもひくいもあゆみをはこぶ、中おしてるやなにはめの、よしあしとなく、かりそめに、うたふひとふし雅びなる、わすれがひとのなはそらごとよあふて別れて其後は、又の花見をたのしみに、ひかすかぞへて思ひ出す、わすれ草との名はいつはりよ、しげりて枯れて其れからは、のちの月見をたのしみに、よはをつみつゝおもひ出す、春や



秋、そのかみ世に光る君、御洲果しの上ほひの、今にたねせず  
 おくはなほ、ふかみごりなるそのなかに、花やもみちをひととき  
 に、こきちらしたる賑は、筆も詞も及びなき、をりしも月の出汐  
 に、つれてふさくる松風の、つれてふさくる松風の、かよふいこ  
 とのねがひもみつや、よつのやしろの御めぐみ、なほいく千代の  
 かぎりなき、みちのさかへと祝しけりく。

生田流の持歌とせらるもの

磯千鳥

うたゝねの、枕に響くあけの鐘、げにまゝならぬ世の中を、何に  
 たとへん飛鳥川、昨日の淵は今日の瀬と、かはりやすきぞかはる  
 など、契りし事も何時しかに、身は浮船の楫をたへ、今はよるべ  
 も白浪の、棹のしづくか涙の雨か、ぬれにぞぬれしぬれ衣、身に  
 しむけさの浦風に、わびつゝや鳴く磯千鳥。

今小町

◎磯千鳥と今小町

戀は大方斯う  
 したものなる  
 べし、



いなにもあら  
ぬ舟と、容  
易く思ひの方  
に寄るが當り  
さして、小町  
なり

◎今小町

松の位に柳の姿、櫻の花に梅の香を、こめてこぼるゝあいさやう  
は、月の雫か萩の、露の情にあこがれて、我もまよふやてふく  
の、戀しなんみの幾日夜、通ふ心は深草の、少將よりも淺からぬ  
淺香の沼の底までも、引く手数多の花あやめ、たとへ昔の唐人の  
山をさくてふ力もて、ひくとも引かぬ振袖は、するな世界の今小  
町、高さ位の花なれば、思ふにかひも嵐山、されど岩木にあらぬ  
身の、いさな男の手くだには、いなにもあらぬいな舟の、しづみ  
もやせん戀の淵、逢はぬつらさは足引の、山鳥の尾の長さ日を、  
うらみかこちて人知れず、こよひ逢瀬の新枕、積る思ひのかた糸  
も、解けて嬉しき春の夢。

エラキ氣焔か  
な

六段 戀慕

松の枝には、雛鶴巢立つ、谷の流れに龜遊ぶ、流れに流れに谷の  
谷の流れに龜遊ぶ、沖の石とはおろかの沙汰よ、乾く間も無き袖  
の海、愚の愚の沙汰よ、乾く間も無き袖の海、戀慕し戀明し、松  
に時雨は眞葛が原に、うらみしに、今は嬉しや、なびき合ふ夜の  
飽ぬ契は、千代も變らじ。

春重

又來る春を面  
白く廻るふると  
云ふ、廻るふると  
つた所が趣の變  
なるべし趣同

富士の嶺の、雪もさすがに春の色を、見せて霞める朝ぼらけ、櫻  
さく方は、何處かしら浪の、寄する岸邊の水匂ひつゝ、昨日今日

◎六段戀慕の春重



いつしか夏にならの葉の、風に落來る一聲は、まだはづかしの森  
 陰に、忍ぶも嬉し足引の、山時鳥鳴きすてゝ、いづちの空も短夜  
 の、隈なく照らす月影に、君が調ふる爪琴の、音に通來る松虫の  
 聲も哀れに秋ふけて、まだき時雨の雲と雲、行き台ふ空の年波に  
 盡さぬ流れの立田川、めでし紅葉に世のうきをを、知らで今年も送  
 り來て、重ねる千代の春をむかふる。

春の曙

あまり道具立  
 の多き春の曙  
 にてはあるせ

明初むる、光をかはず瑞垣や、久しき神の代々かけて、常盤の松  
 色添へぬ、梢に遊ぶ友鶴の、聲も長閑に聞ゆめり、春霞、霞初

めぬる軒端より、ほのくにはふ梅が枝の、花に宿りて鶯の、色  
 香にめづる世の中を、夢の契りを引き結ぶ、初音の今日の玉簪、  
 心をみがくやり水の、影もみどりに青柳の、糸に寄るてふ玉かづ  
 ら、千歳をかけて四方の空、詠めは盡さじ盡せじと、壽き祝ふ春  
 の曙

花の旅

上方式膝栗毛  
 春の旅はこれ  
 半詞の如く、  
 のらりくらし  
 り遊び歩くれ  
 そ面白けれ

春風に、なびく姿や浅みどり、すゐなしうちに誘はれて、思ひ立  
 つ名の出口の柳、都をすぎてこゝかしこ、八町三所かさぢらす、  
 一風かはる大津繪の、七つ道具の武藏坊、かたい石塙の間より、



ぬるり／＼と瀬多鯉、長い旅路を踏分けて、草津の里の姥ヶ餅、  
 つく／＼杖の下くいる、目川の水のしのぶ戀、なんぼ石部のお前  
 でも、心たがはずその手管、座敷さわぎをかこつけて、おどりこ  
 汗は水口に、うまい首尾ちやとのぼり合ふ、坂はてる／＼鈴鹿と  
 あひの、合の土山雨にしつぼりと、大竹小竹坂の下、心のたけは  
 つくされぬ、筆捨山の中を、せきにせかる、椋もこの、娘ご  
 ころの一筋に、津の町通る阿彌陀笠、人目構はぬ旅の空、雲津の  
 川を高からげ、又のとまりを松坂と、つげの櫛田も通り過ぎ、紙  
 の油の口上手、田葉粉入賣る小林屋、おちもおばたも買うて行く  
 數はつもるに限りなき、神の恵みの山田へ、

雁曰く、秋風立  
 き人に、秋風立  
 ちては、秋風立  
 や玉章を送る  
 もすかありと  
 もすかありと  
 上葉の吹きか  
 へしだに、な  
 るべし、な

萩の露

いつしかも、まねく尾花に袖ふれそめて、我からぬれし露の萩、  
 今更人は恨みねど、葛の葉風のそよとだに、訪れ絶えて松虫の、  
 ひどりねになくわびしさを、夜半にきぬたの打添へて、いとこ思  
 ひをかさねよと、月にや聲はさえぬらん、いざさらば、空行く鴈  
 にこと／＼はん、戀しきかたに玉章を、送るよすがのありやなしや  
 ど。

放下僧

三枝の手をも

おもしろの花のみやこや、筆に描くとも及ばじ、東には祇園清水



もさるゝ曲な  
るべし、

茶氣のある戀  
ど、は癖しからぬ

◎茶おんど

100

落來る瀧の音羽のあらしに、地主のさくらはちりぐ、西はほう  
りん嵯峨のおんてら、廻らばまはれ水車の、輪のりんせんせきの  
かは波、川柳は水にもまるゝ、ふくら雀は竹にもまるゝ、都の牛  
は車にもまるゝ、茶臼は挽木にもまるゝ、げにまこと忘れたりと  
よ、こきりこは放下にもまるゝ、こきりこのふたつの竹の、世々  
をかさねてうち治まりたる御代かな。

茶おんど

世の中に、すぐれて花は芳野山、紅葉は龍田茶は宇治の、都のた  
つみそれよりも、里は都のひつじさる、すきとはたれが名にたて

し、濃茶のいろのふかみどり、松の位にくらべては、かこひとら  
ふもひくけれど、なさはおなじ床飾り、飾らぬむねのうらおも  
て、帛紗さばけぬ心から、聞けばおもはく違ひ棚、逢ふてどうし  
て香箱の、柄杓の竹はすぐなれど、そちは茶杓のゆがみもじ、憂  
さとはらしの初昔、昔ばなしのちいばいと、なるまで釜の中さめ  
ず、縁はくさりの末ながく千代萬代へ。

若菜

年はまだ、いくかもたゝぬさゝ竹に、けさそよさら春風を、我  
知り顔に鶯の、百よろこびの音をたてゝ、歌ひつれだら乙女子が

百千鳥の囀る  
野邊に若菜を  
摘むば、老な  
るべし、若や  
るべし、若や

◎若菜

101



摘むや千歳の初若菜、若菜摘む手のやさしさに、梅が枝にさへづ  
る、百千鳥の聲をへば、色さへ音さへ芽出度き、

川千鳥

四季の川風に  
鳴く千鳥の  
さても忙がし  
きことかな

雲と見し、東の山の初ざくら、みどりとなりて鴨川の、岸の柳の  
なびく夜は、ひるの暑さを忘れつつ、如意のみねより出づる月の  
さえまさりぬる霜の夜に、早瀬をつとふ川千鳥、幾千代ちよとつ  
くるにぞ、君がよはひの限り知られず。

楫枕

波のふるく  
からろおす、水の煙のひとかたに、なびきもやらぬ川竹の、うき

思寐安から  
楫枕、緊がら  
舟に似たる  
もある哉、戀

節しげき、うさねの泊り船、よるく身にぞ思ひしる、浪か涙か  
害も露か、ぬれにぞぬれし我が袖を、しぼる思ひをおしつゝみ  
流れ渡りに浮かれて暮す、心盡しの楫枕、さして行衛のとほくと  
も、遂に寄邊は岸の上の、松の根かたきちぎりをば、せめてたの  
まん頼むは君に、心ゆるして君が手に、つなぎとめてや千代萬代  
も。

通ふ神

朝に吳客を送  
り、夕に越人の  
を迎ふる人の  
心廣きよ

田毎にうつる月影ならで、夜ごとにかはる枕の数の、中に粹あり  
不粹あり、濟まぬ心にすむ月の、何がしん氣の種ちやゝら、しり



目づかひも餘所にして、任せぬ首尾を譯あるやうに、愚痴な臺詞が戀のしづ、末は野となれ山みづの、神に心をまかせん。

鐵輪

恐ろしき女の  
私念、平和に  
この歌に等か  
きならす人は  
幸多き身が

忘らるゝ、身はいつしかに浮草の、根から思ひの無いならほんに誰を恨みんうら菊の、露にうつらふ、枯野の原に、散りて果てなで今は世に、ありてぞつらき我が夫の、あしかれと思はぬ山の峰にだに、人の歎きも生ふなるに、況んや年月、思ひに沈む恨の敷積りて、執着心の鬼となるも理、いでいで恨をなさんと、しもとふりあげうはなりの、髪を手にからまいて、打つや宇津の山に夢

現とも、わかざる憂世に、因果は廻り合ひたり、今更さこそ口惜しがるらめ、さて懲りや思ひしれ、殊更恨めしき、仇し男を取つて行かんと、臥したる枕に立ち寄り見れば、恐しや幣帛に三十番神ましまして、煙麴神は穢はしや、出でよ出でよと、責め給ふぞや腹立ちや、思ふ夫をば、取らであるさへ神々に、責を蒙むる悪鬼の神通、通力自在の勢絶えて、力もたよくと、足弱車の廻り合ふべき、時節を待つべしや、先この度は歸るべしと、言ふ聲ばかりはさだかに聞えて、いふ聲ばかりは聞えて、姿は目に見えぬ鬼とぞ成りにける。

夜々の星



何の事やら解  
らす

◎四つの色

玉くしげ、ふたゝび三たび思ふこと、思ふがまゝにかきつけて、  
みすれど海士のかつきして、かるてふそこのみるめにも、ふれぬ  
をいたみ頼みにし、筆にさへだにはづかしの、軒の葱に消えやす  
き、露の身にしもならまほし、ならまく星の光すら、絶わてあや  
なくなるまでも、八夜九夜とおもひあかし、雲井をながめすべを  
なみ、袖のしづくにせきいるゝ、硯の海に玉や沈めん。

、四つの色

この四つの色  
菊は黄にして  
梅は紅にや

限らじな、緑の春を幾千代と、松の齡を身にそへて、幾歳毎に若  
竹の、變らぬ色は水ぐきに、なほ書き送る天の川、君がたよりを

菊の香に、月の縁や長月の、有明月の白妙に、積りし雪は豊年の  
春待つ顔の梅の花。

四の民

廻りくどき  
なれど、民の  
心のかくあれ  
と讀めぬに  
あらず

限りなく、しづかなる代やふく風の、なこそその關の山櫻、鎧の袖  
に散りかゝり、花すり衣陸奥に、駒を進むも君がため、弓を袋に  
すきくはや、かゞしを友とのべのわざ、なつみ水ひきみつぎとり  
たき木をかたにかしこなる、木の間の月をたのしみて、山路のう  
きを忘れめや、雨露霜を凌ぐ身の、たくみはすみと兼てより、大  
宮造り殿づくり、烏帽子素袍も花やかに、賤が軒端もたてつゞき

◎四つの民



錦織るてふはたもの、夜寒いごはじ、あやどりのきぬ、染めて  
貴賤の色わかぬ、おなじ詠めは白妙に、雪はひとしほきぬくの  
なさけあきなふすぎはひに、姿こと葉はいやしくて、心ばかりは  
みなやさしかれ、

四つの袖

いつまでも若くなくて、お氣もじさま也

憂き中の、ならひと知らば斯くばかり、花の夕の契りとなるも、  
初めのなさけ今の仇、いつそ逢はねばかうしたことも、ほんにあ  
るまでよしなやつらや、あだにくらせし月日のほごも、云はで思  
ひの涙の雨に、いとくちなん四つの袖

六つの玉川の  
さらし、いと  
たる調、歌見  
し、だに心地よ

玉川

山城のいでや見ましと駒とめて、なほ水かはん山吹の、花の露そ  
ふ春も暮れ、夏來にけらし見渡せば、波の柵かけてけり、卯の花  
咲ける津の國の、里に月日を送るまに、いつしか秋にあふみなる  
野路には人のあすも來む、今は盛の萩越えて、色なる波に宿りに  
し、月のみ空の冬ふかみ、雪げもよほす夕ざれば、汐風こして陸  
奥の、野田に千鳥の、聲さびしゆかし、名だたる武藏野に晒す、  
さらす手づくりさらしに、昔の人の戀しさも、今はた、そひて  
紀の國の、きの毒なるは忘れても、汲やしつらん旅人の、たか野



◎玉の臺の瀧づくし  
の奥の水までも、名に流れたる六つの玉川。

酒でもめさず  
かは心は晴ゆ  
べし、きはなる

玉の臺も、戀したふ涙川、我身沈めて逢瀬のあるなら、戀にやん  
さすてばや、戀はあだものな、ひと村雨に立寄る宿も、名残はか  
なしきに、ましてやこれは浅からぬ、契りあるにさゝんせ、さか  
づきを、のまう酒を。

瀧づくし

おとに聞く、吉野の瀧のその末は、妹背の山の中にはや、たつ龍  
門の、流れも那智のまさなきに、忍ぶ契のおとなしや、花の鏡の

兎に角涼し氣  
なる歌なり

音羽山、亂る瀧の白糸を、繰り返しつゝ青柳に、櫻まじへし都  
の錦、くれはあやはの織姫や、天つ少女が夏衣、雲井に晒す布引  
の、瀧つ瀬もこす五月雨に、何れあやめかかほよ花、引く手あま  
たの身なれども、いなにはあらぬ有馬山、にしにも名のみあげま  
きや、鼓の瀧のその音は、絶えずたうたり翁の瀧の、面や箕面裏  
見なる、それは東路日の光、月に玉しく嵯峨野の露や、戸無瀬に  
落つる大井川、下す筏にふる雪は、散りかふ花と見まがひて、山  
静なる峰の雪、豊かに積る養老の、なほも齡をます泉

袖香爐

◎袖香爐



かばか、流樹  
のまは、多くあ  
るまじ、か  
る秋の、伽羅の  
香ひや、伽羅の  
べゆかし、か  
き、か、るか

可といふ鶴  
の一、は、さ  
し、うれ

◎鶴の聲の椿づくし

春の夜の、やみは黒白なしそれかよ、香やはかくる、梅の花、  
散れどかざりは猶残る、袂に伽羅の煙り草、まつく惜めどその甲  
斐も、なき玉ごろもほんにまア、柳はみどりくれなるの、花を見  
すて、歸るかりがね。

鶴の聲

軒の雨、立よるかげは難波津や、あしふく宿のしめやかに、かた  
りあかせし可愛ごは、嘘かまことかそのことのはに、鶴の一聲い  
く千代かけて、末は互ひの友しら髪。

椿づくし

初句、つら  
と椿からして  
振つて居る也

つらつら椿春秋の、名は千里まで鷹が峰、その本阿彌の花の色、  
白さをものうつし繪も、いかで及ばん妙蓮寺、薄紅に濃き紅は  
おなじ花形の因幡堂、まださしをりの秋の山、さが初嵐身にしみ  
て、露は雨ふる頃よりも、すきもてあそび埋火の、春に移れば天  
が下、賑ふ民の煙立つ、それは鹽釜千賀の浦、汐波む海人の腰蓑  
の、あづまからげや東路や、清洲の里の散り椿、咲きも残さぬ角  
の倉、野夫の中なる豪の者、卜伴わびすけから椿、八千代つさせ  
ぬ花の数。

根引の松

◎根引の松



たげに、目出  
ひまはしたり

神風や、伊勢の神樂のまねびして、をぎにはあらぬ笛竹の、音も  
催馬樂に吹をさめばや、難波津の難波津の、あし原に登る朝日の  
もとにすむ、谷野の鶴の聲々を、琴の調べに聞きなして、軒端に  
かよふ春風も、ふさやめうがのめでたさに、野守が宿の門松は、  
老たるまゝに若緑、代もうらゝかになりけり、そもく春のと  
くわかに萬歳、祝ふ君が代は、蓬が島もよそならず、秋津島てふ  
國のゆたかさ。

難波獅子

三つの祝歌を

君が代は、千代に八千代にさゝれ石の、いはほとなりて苔のむす

合せて、此歌  
の起れる理由  
を解せず

まで、立ち並ぶやつをの椿八重櫻、ともに八千代の春にあはまじ  
高き屋に登りて見れば煙立つ、民の竈は賑ひにけり。

名取川

うき名とり川  
名取川、流れ  
に任す身が、れ  
さても世には  
多かる

陸奥の信夫緋摺誰ゆるゑに、亂れそめにし思ひをも、せめてしばし  
は忘草の、それにはあらで我が名をば、忘れんことの恥しと、袖  
にうつして行く道の、一人の旅の名は二人連、慰めながら一ふし  
の、踊拍子のかげ聲や、匹田の踊は面白や、おゝそれくは我が  
名は何と、くり返りくり返しつゝ、往來の人の笑ふとも、なんの  
まゝよさまの川、これも河邊に着きにけり、いざや渡らん向ふ



の岩と、思ひわたりてよく見れば、袖跡なき濡衣、我は戀せぬ  
 身なれども、うき名を流すこの川の名も今更にうらめしき、よし  
 や流れも果しなき、底なるわれをすくはんと、川は様々多けれど  
 伊勢の國にては、御裳裾川の流れには、天照大神の住み給ふ、熊  
 野なる音なし川の瀬々には、権現御影を遷し給へり、光源氏のい  
 にしへ、八十瀬の川と詠めける、鈴鹿川を打渡りて、近江路にか  
 られば、幾瀬渡りも野洲の川、すのまたあせかぐんせ川、そばは  
 淵なる片瀬川、思ふ人によろへては、阿武隈川もなつかしや、つ  
 らきに付けて口惜しさは、あひぞめ川なりけり、すみ染の衣川、  
 衣の袖をひたして、岸蔭やまこもの、薬屑の下をおしまはし、か

つぎ上げ、すくひ上げ、見れども、見れども、我が名は更に無か  
 りけり。

ながらの春

賑はふや、春の朝たつ霞ばれ、志賀の都はあれにしを、ながらの  
 山の山ざくら、昔を今が思ふなる、花のさかりも一やうに、四方  
 のながめも盡させじと、高観音の庭櫻、向ふはるかに三上山、へ  
 だつる鳩のうみの面、そのうらくも見えわたる、ゆきかふ船の  
 かち音も、風の便りも聞ゆなる、遊びたはむれ春のくれ、名残を  
 惜むもろ人の、入相つぐる三井寺の、鐘の聲さへ吹きかへす、風

日もながらの  
 春のながめ  
 心うきたつ景  
 色かな











な、どうでも男は悪生者、さくらくとうたはれて、云うて袂に  
 譯二つ、つとめさへたうかくと、どうでもをなごは悪生者、  
 あづま育ちははすはなものぢやえ、戀のわけ里かぞへかぞへりや  
 武士も道具をふせ編笠で、はりと意氣地のよし原、花の都は歌で  
 和らぐしき島原に、つとめする身は誰と伏見の墨染、煩惱菩提の  
 撞木町より、なにはよすぢに、かよひきつぢの、かぶろだちちか  
 ら室の花咲、それがほんの色ぢや、一イニウ三イ四、夜露雪の日  
 しものせきぢも、ともにこの身を那染重ねん、中は丸山たい丸か  
 れと、思ひつめたが縁ぢやえ。

宇治めぐり

名所にも歌にも茶氣あり

萬代を、摘むや茶園の春風に、壽添へて佐保姫の、賑ふ袖の若緑  
 人目をなにと初昔、霞をわけし青山の、小松のしろや綾の森、千  
 歳さはりのなくむしに、齡ゑいせん中むかし、誰にも年を譲り葉  
 の、千代の緑の松の尾の、神代の末の後昔、光を添えて園の梅、な  
 ほ白梅の色香にも、深くぞうつる川柳、湖水こすだに宇治の波、  
 初花見する山吹の、花橋のにはふてふ、夢を結ぶのありたかや、  
 小鷹の爪にえだしめて、こかげも多き一森の、喜撰の庵の夏の峯  
 瀧の音をも菊水の、朝日山の端薄紅葉、たか尾の峯にかりがねの  
 あさる聲々笠ごりの、かすまんどころおもしろや、こころをすま  
 す老らくは、いはひのしろとうたふ舞鶴、



梅の宿

梅さく宿には  
自ら人も訪は  
む

糸竹の、世々ふしなれし鶯の、聲のしらべもあら玉の、いく春が  
すみたつ名こそ、いちしろたへににをふらめ、梅さく宿や千代な  
らん、梅さくやどや千代ならん。

黒髪

この雪の朝の  
手枕、殊に上  
々なるべし

黒髪の、むすぼれたる思ひをば、とけて寐た夜の枕こそ、ひとり  
寐る夜はあだ枕、袖はかたしくつまぢやと云ふて、愚痴な女の心  
は知らず、しんと更けたる鐘の聲、ゆふへの夢の今朝さめて、ゆ  
かしなつかしやるせなや、つもるとしらで積るじら雪。

例によれるめ  
でたき歌

八千代獅子

いつまでも、かはらぬ御代にあひ竹の、世々は幾千代八千代ふる  
雪ぞかゝれる松のふた葉に、雪ぞかゝれる松の二葉に。

八重衣

君が爲、春の野に出で若菜揃む、我が衣手に雪はふりつゝ、春過  
ぎて夏來にけらし白妙の、衣ほすてふ天の香具山、みよし野の山  
の秋風さよ更けて、故郷寒く、衣打つなり、秋の田のかりほの庵  
の苦をあらみ、我が衣手は露にぬれつゝ、さりざりす、鳴くや霜夜  
のさむしろに、衣かたしき獨かもねん、衣片敷き獨かもねん。

寧そつぎ合は  
す程ならば  
斯うした方が  
重かるし、八  
つ重衣はよくも  
なげたる題か



八 しま

歌既に平家物  
展の繪巻物な  
展ずるが如し

釣のいとまも浪の上、霞わたりて沖ゆくや、あまの小舟のほのぼ  
のと、見えてぞのこる夕暮に、浦風さへものごかにて、しかも今  
宵はてりもせず、曇りもやらぬ春の夜の、おぼろ月夜にしくもの  
はなし、西行法師はなげけとて、月やは物を思はする、やみはし  
のぶにようかよか、うなせでたぞきそくくもれ、また修羅道  
の関の聲、矢さけびの音震動して、けふの修羅の敵は誰が、なに  
能登の守のり経とや、あらものくしや手なみは知りぬ、思ひり  
いづる檀の浦の、その船軍今は、や、閻浮にかへるいき死の、海

山一度に震動して、船よりは関の聲、陸には波の楯、月にしらむ  
は劍の光、潮にうつるは兜の星の影、水やそら、そら行くもまた  
雲の浪、打合ひさしちがふる船軍のかけひき、うき沈むとせし程  
に、春の夜の浪よりあけて、敵と見えしはむれ居る鷗、関の聲と  
聞わしは、浦風なりける高松の、浦風なりける高松の、朝あらし  
どぞなりにける。

藤 戸

うしやいにしへを、忘れんと思ふ心こそ、忘れぬよりは思ひなれ  
さるにても身はあだ浪のよるべなくとも、とがによるべの水にこ

添ろしき人の  
思ひ、歌も調  
もあはれ深し

◎藤戸



そ、濁る心の罪あらば、重き罪科もあるべきに、よしなかりける  
 海路のしるべ、思へば三途の瀬ぶみなり、さるにても忘れがたや  
 あはれなる浮洲の岩の上に、我をつれて行く水の氷の如くなる、  
 かたなをぬいて、胸のあたりをさしとほし、さし通さるれば氣も  
 魂も消えくゝとなる所を、そのまゝ海におし入れられて、千尋  
 の底に沈みしに、折ふしひく沙に、ひかれて行く水の、うきぬ沈  
 みぬうもれ木の、岩のはざまに流れかゝつて、藤戸の水底の、悪  
 龍の水神となつて、恨みをなさんと思ひしに、思はざる御弔の、  
 御法のみふねに乗を得て、則ち弘誓の船にうかべば、みなれ棹、  
 生死の海を渡りて、願ひのまゝにすやくゝと、彼の岸にいたりつ

ゝ、かのきしに至りけり、

こすのと

心にくき歌な

萍は、思案の外の誘ふ水、戀が浮世か浮世が戀か、ちよつときゝた  
 い松の風、とへと答へず山ほとゝぎす、月やは物をやる瀬なき、  
 癩にうれしき男の力、ちつと手に手を何にもいはず、ふたりして  
 つる幟のひも。

狐

會

物すこきほど  
あはれ深き歌  
にてはある哉

いたはしや母上は、花の姿を引かへて、しほるゝ露の床の内、智  
 恵の鏡もかき曇る、法師に見え給ひつゝ、母をまねけばあとみか



へりて、さらばといはぬばかりにて、泣くより外の言葉なき、野  
 越え山越え里打過ぎて、来るは誰ゆるそさまゆる、誰故くるは、  
 くる誰ゆるそさまゆる、君は歸るか恨めしやいなうやれ、わがす  
 む森に歸らん、我思ふ我思ふ、心のうちは白菊、岩がくれ蔦がく  
 れ、しのゝ細道かさわけ行けば、虫の聲々おもしろや、ふりそむ  
 る、やれふりそむる、やれふりそむる今朝だにもくも、所はあ  
 ともなかりけり、西は田の畦あぶないさゝ、谷峯しどろにこえゆ  
 け、あの山越えて此山越えて、こがれこがるゝ憂思ひ

越後獅子

長眼のな節約  
 したるならん  
 が、この方歌  
 り、少し無理あ

越路がた、おくに名物さまざまなれど、田舎なまりの片言まじり  
 しらうさぎなる言の葉に、おもしろがらしそふな、ことなほ浦の  
 海士の子が、七ツ八ツ目うなぎ迄、住むやあみその綱手とは、懸  
 のころもこめ山の、當販うはさて黄連も、何糸魚川いとうをの、  
 もつれもつるゝくさ浦の、油漆とまじはりて、する松山の白布の  
 ちいみははだのごこやらが、見えすく國の風流を、うつし太鼓や  
 笛の音も、ひいてうたふや獅子の曲、向ひ小山の紫竹だけ、枝ぶ  
 しそろへて、きりをこまかに十七が、もろの小口にひるねして、  
 花のさかりを夢に見てそろ、夢のうらかた越後の獅子は、ぼたん  
 にもたねと富貴はおのが、すがたにさかせ舞をさむ、姿にさかせ



まひをさむ。

出口の柳

たてまつる、奈良の都の八重ざくら、けふ九重にうかれ来て、二度のつとめも島原の、出口の柳ふりわけて、戀と義理との二重帯結ぶ契りは仇し野の、露の浮世を誰故に、世渡る船のかひもなやよるべ定めぬ海士小舟、岸にはなれてたよりなや、島がくれゆく磯千鳥、しのび寐に鳴くうき涙、顔が見たさに又こゝへ、木辻の里の朝ごみに、なたねや罌粟の花の色、うつりにけりないたづらに、我身はこれなうこの姿、つれなき命ながらへて、またこのご

出口の柳には  
平角にうしろ  
髪を引かる  
なり

ろやしのばれん、しのぶにつらき目せき笠、深き思ひが切なけれ。

葵の上

實に世に在りし古は、雲上の花の宴、かゝる怨に愛き人は、何を歎くぞ葛の葉の、もつれもつれて逢ふ夜はほんに、憎くや憎くやは鳥鐘ばかり、ほかに妬は無きぞな無きぞ、なんなん菜種のかり寝の夢か、我は胡蝶の花すり衣、袖にちりく露涙、びんとすねても離れぬつがひ、辛氣昔の仇枕、此の上はとて立ち寄りて、今の恨はありし報、噴雫のはむらは身をこがす、思ひ知らずや思ひ知れ、恨めしの心や、あら怨めしの心や、人の怨みの深くして、

人の思ひも凝  
りては、いよ  
なり、恐ろしい  
く、なまきり行  
くものにや



うさねになかせたまふとも、いさて此世にましまさば、水くらさ  
 澤邊の螢のかけよりも、光君とは契らん、わらは蓬生の、もと  
 あらざらし身となりて、葉末の露と消えもせば、それさへことに  
 うらめしや、夢にだにかへらぬものを、我契り昔語となりぬれば  
 猶も思ひは十寸鏡、その面影もはづかしや、枕にたてるやれ車、  
 打ち載せかくれ行かんとぞ、いふ聲ばかりは松吹く風、いふ聲ば  
 かりは松吹く風、さめてはかなくなりけり。

梓

恐ろしや人の 三つの車に、のりの道、夕顔の宿の破車、あら恥しや我が姿、梓

こころ、なつ  
 かしかりし時  
 の面影、かほ  
 ればかほるも  
 のにもあるか  
 な

の弓の末頭、顯れ出でし面影の、昔忘れぬとりなりを。あれあ  
 れあれ、あれを見や、蝶は菜種に菜種は蝶の、番離れの妹背の  
 仲を、見るにねたまし又羨まし、我は磯邊の友なし千鳥、わくら  
 はに、わくらはに、問ふはうれしやさりとは、とはれて今恥か  
 しの、漏りて浮名の手束弓、さいた白羽の矢はだて姿、人の目に  
 つくいたづら髪、なんぼいはれし仲なれど、今は秋田の落し水  
 さつき雨はど、戀ひしのばれて、なほなほ盡きぬ恨ぞや、共に奈  
 落の苦しみ見せんと、彼方へ引けば此方へ引く、行きては歸り、  
 歸りてはあら名殘惜しや、戀は曲者いろくの、花や紅葉に移り  
 氣の男はいやよ、さりとは、ほんに辛苦もいとほぬ悪性、底の



心は水臭ひ、流の私が辛抱を、思ふて見さんせあだ胴慾な、いや  
 とよそれは虚言よ、袖の時雨は誠の血しほ、染めし誓も偽ならず  
 二人かはせし契も今は、あだになりゆく妬のほごを、思ひ知らず  
 や忍ひ知れど、鉄杖振り上げ丁々々、打つや現の手にも取られず  
 露か螢かちらくく、兒手柏手に結びし水も、笹の葉に、又立  
 ち寄るを幣おつ取つて、謹請東方南方北方西方、各守りの冥部  
 の神佛ましませば、怨靈何處に止まるべきと、祈り禱られかつば  
 とまろぶと見わけけるが、今より後は來るまじと、呼はる聲は雲に  
 響き、いふ聲ばかりは雲に残つて、姿は見えずなりにけり、此の  
 曉に空吹く風、この曉に空吹く風、夜は白々と明けにけり。

あづま獅子

むかしより、いひならはせし、あづまくだりのまめをとこ、した  
 ふ戀路や松が枝の、富士の高根に白妙の、花のすがたによし原な  
 まり、君が身にそふ牡丹になれて、おのが富貴の花どのみ、やた  
 け心もにくからじ、おもひおもふ千代までも、なさけにかざすき  
 ぬぐに、いと竹のこゝろみだれがみ、うたふ戀路や露そふ春も  
 くれ竹の、かざす扇にうつす曲、はなやかに、みだれみだるゝい  
 もせの道も、獅子のあそびていくよまで、かはらぬいろやめでた  
 けれ。

心の狂ひと文  
 字の狂ひと衝  
 突する歌也



あしかり

戀には狂はれ  
ど戀といふ  
字に迷ふと  
思つたり仕  
りは出来ぬ  
同じ洒落なり

名にたかき、浪花の浦の夏景色、風にもまれし、芦の葉の、さわ  
くくとおとにさく、こゝには伊勢の濱荻を、よしやあしとは  
たがつけし、我は戀にはくるはねど、戀といふ字に迷ふゆる、さ  
りとては白さぎよといまれ、とまれと、招く手風に行き過て、ま  
たも催す濱風に、あしも澤立磯の浪、松風こそはさいんざ。

西行櫻

花とりんく  
咲振、賑はし  
きこと哉

九重にさげごも花の八重櫻、いく夜の春をかさぬらん、しかるに  
花の名だかきは、まつはつ花をいそぐなる、近衛どの、糸櫻、見

わたせば、柳櫻をこぎませせて、みやこは春のにしきさんらんたり  
ちもとのさくらをうるおき、そのいろを所の名にみする千本の花  
ざかり、雲路やゆさにのこるらん、毘沙門堂の花ざかり、四王天  
の榮花にも、これにはいかでまさるべき、うへなる黒谷下がはら  
むかし遍昭僧正の、うきよをいとひし華頂山、わしのみやまの花  
のいろ、かれにし鶴のはやしまで、思ひしられてあはれなり、清  
水寺の地主のはな、まつふく風の音羽山、こゝはまたあらし山、  
となせにおつる瀧つなみまでも、花は大井川、いせきに雪やか、  
るらん。

里の曉



短夜のあけがた、餘波のつがべきぬことなるべし、

嵯峨といへば、秋を聯想す、水車以下茶お入どのあまり

◎嵯峨の春

一四〇

梓弓、 いるかたゆかし夕月の、 匂へる春もたち花の、 夏來にけらしひと聲は、 山ほとゝぎすなきすてゝ、 あやめも知らぬ鳥羽玉のやみ夜をてらす螢火の、 其の影さへもかげろふの、 たちまさりたる思ひねの、 なき玉かへす唐の、 其の古事の忍ばれて、 空炷ならぬ煙のするも、 たへにかほりし雲の端の、 いづち行くらん短夜の空。

嵯峨の春

去年見にし、 彌生なかばの嵯峨の春、 嵐の山の山櫻、 色香たへなる花の縁、 散りても残る心の花に、 思ひ亂るゝ憂身にも、 またく

うれしからぬ歌を流用したるは感服せず

題意に叶へる麻にて、 此手しるし、

りかへす此春も、 くむや泉の大井川、 浮むいかたの行末は、 人の手いけとなる花を、 恨むや己が迷ひをば、 拂ふは法のおくちかひ嵯峨の寺々まはらばまはれ、 水車のわのりせん關の川波、 川柳は水にもまるゝ、 ふくら雀は竹にもまるゝ、 都のうしは、 車にもまるゝ、 茶臼はひき木にもまるゝ、 我は色香にもまれ、 もまれて玉の緒も、 たえぬばかりに思ひ川、 床にふちなす夜半のさぬゝ。

さらし

旗の島にはさらす麻布、 賤がしわざは宇治川の、 浪か雪かと白妙に、 いざ立出でゝ布さらす、 かさゝぎの渡せる橋の霜よりも、 さ

◎さらし

一四一



事廣く流用さ  
るゝもことば  
り也、

らせり布にしろみありそろ、のふく山が見ねそろ、朝日山に霞  
たなびくけしきは、たとへ駿河の富士はものかはく、小島が崎  
による浪に、小島が崎による浪に、月の光りを寫さばや、月の光  
りをうつさばや、見渡せばく、伏見竹田に淀鳥羽も、何れおと  
らぬ名所かな、何れ劣らぬ名所哉、立つ波はく、瀬々のあじろ  
にさへられて、流るゝ水をせきとめよ、流るゝ水をせきとめよ、  
所からとてな、所からとてな、布を手とてな、まきのさと人うち  
つれて、もどろうやれしづが家へ。

さむしろ

◎さむしろ

一四二

今を昔とまた  
偲ばるゝ時  
來るべし

去年の秋、散りし梢は紅葉して、今また峰にありあけの、月日は  
かりを敷へても、待つにかひなき村時雨、時しもわかすふるから  
に、色も褪せつゝいつしかに、我袖のみやかはるらん、なく音を  
添へてきりくす、夜半の枕につげ渡る、嵐の末の鐘の聲、結ば  
ぬ夢の覺めやらで、只忍ばるゝ昔なりけり。

櫻川

あらたまの春は氷もとけそめて、なみの花こそよすらめと、せい  
の白なみしげければ、霞うながす浮島の、げにやおもしろや、昔  
の春も今もなほ、かはらで花のうるはしき、水もにぐらぬさくら

うららかなる  
春の櫻川  
葉の花もいと  
句はしくこそ

◎櫻川

一四三



川●

酒

少し管に近き  
歌より

酒ははかりなしとのたまひし聖人は、上戸にやましましけん、三  
十六の失ありと、いさめたまひし佛は、下戸にやおはすらん、何  
はともあれ八雲立つ、出雲の神はやしおりの、酒に大蛇をたいら  
げ給ふ、これみな酒の徳なれや、をいし酒つるかしこみも、み  
かどのゑひのすゝみなり、ひめのみことのまち酒を、さゝよさ  
ゝこの言の葉に、つたへて今この世の、人もさこしめせさゝ、  
さこしめせさゝ、劉伯倫や李太白、酒をのまねば尋常の人、芳野

何となく心細  
く感じらるゝ  
歌なり

龍田の花紅葉、酒がなければたゞの所、よい／＼よいのよいやさ  
あ。

残

月

磯邊の松に木がくれて、沖のかたへと入る月の、光りや夢の世を  
はよう、さめて真如の明らけき、月の都に住むやらん、今はつて  
だに朧夜の、月日はかりはめぐりきて。

貴

船

貴船の神も、  
運ぶ思ひのか  
す／＼に玉ふ  
な投げ玉ふこ

蜘蛛の糸に、荒れたる駒は繋ぐとも、二道かくるその人を、如何に  
頼まんあだし野の、あだしこの身はま／＼にはならぬ、月日程へて



ともあるべし

昔の譯を、思ふも濡るゝ我が袖の、湊に返る仇浪の、夜よる毎に  
 立ち出で、ふりさけ見れば大原や、御室に近き小鹽山、糺の森  
 の木の間わけ、通ひ車のたろがれ見れば、車の車のたそがれ見れ  
 ば、包む辛さと袂にあまる、譯をいふ染左の腕、股に助様命とほ  
 りし、其睦言もいつしかに、變る淵瀬となげいたあまの、捨て船  
 我ひとり、こがれこがれて行く水の、影さへ清き賀茂川や、やつ  
 れ果てたよ我が顔かたち、かくは、見捨てそよしなやな、三尺袖  
 を年が寄りたら、何振ろしよかいな、振れや振れ、古夫いとし、  
 我ふるづまを、ゑいゑいあそにみぞろの池、波にひよひよと、鳴  
 くは鶺鴒、小池に住むは鶺鴒はんま千鳥がちりゝんな、ちりゝんち

ゝりつ、ちんちんちつとして、さてはゑりくりゑんじよの岩間、  
 岩間を傳ふ足は千鳥あし、西は田の畦、あぶないあぶないあぶな  
 い、あぶなうてならぬへ、細道畦道を、くゞりくゞりくゞりて、  
 くゞりくゞりて松の嵐に、颯々ど、漲り落つる鞍馬川、戀の淵瀬と  
 身はたどれども、猶も思ひはうしの時、撞き出す鐘と諸共に、貴  
 船の社に着きたまふ。

ゆかりの月

うしと見し流れのむかしなつかしや、かあひ男にあふ坂の、關よ  
 りつらい世のならひ、思はぬ人にせきとめられて、いまはのさは

何うしても夕  
 陽を演出する  
 爲に作れる歌  
 なり、豈にし



て麗、

夕顔の花の下  
紐とけ離さ  
は人の心ぞ

◎夕顔

のひとつ水、すまぬ心の中にもしばし、すむはゆかりの月のかけ  
しのびてうつす窓の内、廣い世界に住ながら、せもうたのしむま  
こと、誠、こんなるにしが唐にもあるか、花さく里の春ならば、  
あめもかをりて名やたゝん。

夕

顔

住むや誰、とひてや見んとたそがれに、よする車の音信も、絶え  
て床しき中垣の、すまもとめて垣間見や、かざす扇にたきしめ  
し、空だきもの、ほのくと、ぬしは白露光りそふ、いとやはへ  
あるゆふ顔の、花にむすびしかりねの夢も、覺めて身にしむ夜半

夕空の定めな  
き雲、まよいな  
らぬこそ儘な  
らぬは面白し

の風。

夕

空

筆のさや、たいてせこまつ蚊やり火の、うはの空にや立ち登る、  
水にかづく枕の下は、戀を積りてけふの瀬に、身は浮草の寝入  
るまもなき、まゝならぬこそまゝならぬ。

御山獅子

獅子の歌には  
大分あてられ  
たり、御山と  
冠する丈に、  
念これ少し入

神路山、昔にかはらぬ杉の枝、かやの御屋根に五色の玉も、光を  
てらすあさ日山、清き流れのいすゞ川、御裳裾川のはしのみ、  
宇治の里ぞと見わたせば、頃は彌生の賑はしき、門に笹たて鈴の

◎夕空◎御山獅子







秋は猶、月の景色も面白や、木ずるくにさす影の、臥床に映る夕まぐれ、外面は虫の聲々に、かけて幾世の秋に鳴く、音を吹き送る、あらしにつれて、そよぐは窓のむら竹、

四季の花

まことに淡白  
としたもの也

はるは花、なつはたちばな、秋はきく、冬はすいせんむめの花。

四季の詠

嫌味なき所だ  
けな買ふべき  
歌なり

梅のにはひに柳もなびく春風に、桃の彌生の花みてもどる、ゆらりくと夕霞、春の野がけにせりよもぎ、つみかけたる面白さ、里の卵の花田のもの早苗、色見えて茂る若葉の影とひゆけば、ま

だき初音のやま時鳥ひと聲に、花のなごりもわすられで、いへづとにかたらばや、草葉色づき野菊もさきて、秋ふかみ、野邊の朝風つゆ身にしみて、ちらりくとむらしぐれ、よしやぬることもみち葉の、そめかけたるおもしろさ、野邊のかよひち人めもくさも冬枯れて、落葉しぐる、こがらしの風、みねのすみがま煙りもさみし、降る雪の、野路も山路も白妙に、見わたしたるおもしろさ。

四季のゆき

如何にも雪の

そもくと天の潤ひに、雨露霜雪の四つを見せ、おなじく雪月花の



如く奇麗なる歌

三つの徳をわかつにも、雪こそことにすぐれたれ、まづ春は梅さくら、咲よりちるまでも雪をわする。色はなし、夏はさみだれのふるやの軒はくねながら、庭はくもらぬ卯の花の、垣根や雪にまがふらん、夜さむわすれて待月の、山の端白き影までも、降ぬ雪かとうたがはれ、冬野に残るさくまでも、また初雪とおもしろき山路のうさやわするらん、やまぢのうさやわするらん。

深夜の月

思ひにふくる夜の月、あはるはべし、ほは深

山の端に、ひとつら見ゆる初雁の、聲もさびしくいたづらに、あだしごさばの人でゝる、あかぬ別れのかなしさは、夢現にもその

人の、知らぬ思ひの涙川、うつすがたや鐘の音に、空飛ぶ鳥の影なれや、それならぬこひしき人はあらかかせ、うき身にとほるはげしさは、君にうらみはなきものを、小萩における白露の、くだけておつる袖たもと、おもふ心のたへぐに、虫の聲々さえわたる、なく音ふけゆく秋の夜の月。

新道成寺

花のほかには松ばかり、くれそめて鐘やひらくらん、鐘に恨みは数々ござる、まづ初夜の鐘をつくときは、諸行無常とひやくなれ後夜のかねをつく時は、せしやうめつばふとひやく也、じん朝の

春の舞臺に立ちて、裏心のあり、秀逸の歌



ひいききは生滅々己入相はじやくめつ爲樂とひいけども、われは後生のくもはれて、真如の月を詠めあかさん、道成卿はうけたまはり、はじめて伽らん立花の、道なり興行の寺なればとて、道成寺とは名付たり、山寺のはるの夕暮来て見れば、入相の鐘に花やちるらん、入相の鐘に花やちるらん、さるほどにさるほどに、寺での鐘、月おち鳥ないて霜雪天に、みちしほほどなく日高の寺の江村の漁火愁にたいして、人々眠れば、よきひまぞとて、立舞ふやうにて、ねらひよりて、きかんとせしが、おもへば、此かねうらめしやとて、りうづに手をかけ、飛とぞ見えしがひきかづきてぞうせにける。

青柳の永き春の日の夢ごころ、や通ふらへ、

新青柳

されば都の花ざかり、大宮人の御遊にも、蹴鞠にはのおも、よもとの木蔭枝垂れて、くれにかすある沓のおと、柳櫻をこぎませて、錦を飾る諸人の、花やかなるやこすのひま、もれくる風のにほひきて、てがいの虎の引綱も、長き思ひにならの葉の、其柏木もおよびなき、懸路はよしなしや、これは老いたる柳の色の、かりぎぬもかざおりも、風にたいよふあしもとの、たよ〜としてなよやかに、立舞ふ振の面白や、げに夢人をうつづにぞ見る、げに夢人をうつづにぞ見ん。



# 名所土産

大和より山名所城  
かけての春日野  
土産のこのナ  
のくんだりのナ  
ゲブシ、のこれ  
を聞くものされ  
せん

水無月の、初旅衣きて見れば、こゝは住よしあをによし、奈良坂  
越えてゆふ暮の、空も静に寂滅爲樂と告げ渡る、これぞ名に負ふ  
大佛の、かねごと漏れて高圓の、よそに浮名や立田山、三輪の山  
路を裳裾の糸の、いとゆるふるさと春日野の、社にしはしこの手を  
ば、合せ鏡のそこ清く、あれく南に雲の峰、暑さ凌ぎの三笠山  
月の七瀬の飛鳥川、かはるや夢の敷そへて、名所名所の都の辰巳  
字治の川面ながむれば、遠に白きは岩越す浪か、晒せる布か、雪  
に晒せる布にてあり候、賤の女が脛もあらはに、よそねじま、馴

れし手業も玉ぞ散る、波のうねく白玉ぞちる、あら面白の景色  
やな、あら面白の景色やな、我も家路に立ち歸り、つとに語らん  
花の家苞に語らん。

## ひなぶり

戀のおもにのな、島のうち、おくりむかいかくかごの、誰であ  
らふと、してこひな、ぼうはなに、くりつけたるちやうちんの  
日がらやくそくしてきたれ、たかおも、ひくいも色のみちなへ、  
たてるたてんのいきづへも、つきぬたのしみゑいさつさ、おせお  
せゆめのかよひぢへ。

花柳の巷を幻  
響にうつし  
る如く、つし  
る陽氣なる歌  
なり



關づくし

關の數の多かる中に、人目の關なるべし

人知れぬ、我が通ひ路の關守は、宵々ごとにうちもねて、戀の流の柵に、なりて人目の關しげき、忍ぶの山の露涙、かゝれどてしもうば玉の、夜々ごとに仇枕、一人片敷く衣手の關、夕々にあま人の、ぬれて刈りほすわたづみの、みるを逢ふにてやみてたい、それとばかりのなこそその關よ、霞が關のかごとにも、秋風ぞ吹く白河の、關路の鳥ははかるとも、よに逢坂の關の戸は、あけてながくゆるさねば、あまる思ひを我ながら、猶せきかねて胸は富士、袖は清見の關なれや、煙も波も立たぬ日ぞなき、戀に品々さ

はりがとざる、忍ぶその夜の月影一つ、別れおそしと鳴く鳥の聲逢はで立つ名や逢ふての浮名、いづれ思の種をかじ。

末の契

兎角末の契りの當にならぬこと哉

白波の、かゝる憂身と知らずやは、君にみるめを戀すてふ、なきさに迷ふ海士小舟、浮いつ沈みつ寄るべきへ、荒磯つたふあしたづの、なきてをともになつかゆみ、春を心の花と見て、別れ給ふなかくしつゝ、八千代經るとも君まして、心の末の契りたがふな。



新作もの

千

壽

下田歌子

燭は暗し敷行眞氏の涙、夜は深し四面楚歌の聲、御いたはしやいとほしや、さのふは翠帳紅圍のうちに、錦をかつぎ綾をしま、おほどのごもりしたまひけむ、比翼連理の夢さめて、けふは東にどらはれの、おん身とならせたまひては、旅雁の妻をしたい、孤猿の友を呼ぶ聲ならで、寐さめことふものやなからむ、一樹の蔭一河の流も、他生の縁とさくものを、鸞鶴の衾はかさねずとも、同じむしろ一つ床に、あけくれなづさひまゐらせし、君がこゝも

のうつり香の、いづの世にかは忘られん、流水去つてかへらずば落花いかでかさいまるべき、かりの宿りに結びつる、露のゆかりを忘れずば、情さ訂にさくといふ、蓮のうてなノウへにだは。

四季の歌

中川愛米作  
山田松枝調

門松

この國々にためしなき、わが大御代にあひ生の、松によそへて門ごとに、立つるや女夫の松飾り。  
さのふは蜂の雲をそめ、ふもとの琴の音に通ふ、しらべを茲に引かへて、来しと女松の囀やけば。



われは海邊にあし鶴と、千歳かはらぬ月かげを、宿せしものを今  
 ここに、來しと夫松は語らひぬ。  
 昔ゆかしさそのふりに、みどりの色も一しほに、さすや初日の影  
 たかき、みさを、吾は友と見む。

梅の花

われもし花と生れなば、いかなる枝を選ぶべき、いかなる色香擇  
 ぶべき、さても多かる花のなか。  
 枝も折れよと吹く風も、幹もこほれと降る雪も、しらぬ顔にぞ咲  
 いでし、花はたぐへむ物もなし。  
 春永の春のはたじるし、白きは清くくれなゐは、いとうるはしき

花の色、今も目に見る心地して。  
 幾世かへせす谷の戸を、したいていづる黄鳥の、羽かせの匂いひ  
 しらぬ、梅の花ともならむかな。

春の空

東風吹野邊に來て見れば、里のうなるが麥笛を、雲雀のうたに和  
 しつゝ、ならず節こそ面白けれ。  
 山路の春を尋め來れば、賤がたき木もひと枝の、花に匂ひて雲に  
 入りし、色見すること嬉しけれ。  
 春の海邊を見わたせば、浪の花さへにはふまで、かすみの中をゆ  
 く鳥か、しら帆の影も長閑なれ。



さてもその花其かすみ、自然らなる繪となりて、あかぬいろさへ  
姿にて、春のころは空ならん。

花の色

いく百千とせ敷しまの、やまと心をもつひでの、すまふ軒端に春  
かせの、通ふかぎりは野の末も、  
山のおくにも隔てなき、色にぞにほふさくら花、げは此花のあり  
てこそ、長閑に空もかすむなり。  
雨を含みて咲く見れば、女ごころのやさしさも、かくあれかしと  
思ふ迄、花のすがたの懐がしく、  
風に吹れて散る見れば、男ごころのをしさも、斯あれかしと思

ふまで、ちり行く末も慕はし。

藤の花

すがた優しく蔓垂れて、さけるを庭のをしへ草、かゝれど人に仰  
がれて、めではやさる、藤の花。  
たのめるかげも大松の、ひだりの枝に春を送り、みぎりの枝に夏  
を迎へ、やがて褪なん色もなし。  
其むらさきの由縁さへ、いと懐かしき住し世の、文に名を得しそ  
の人の、操のほどもしのばれて。  
池の底にも咲きかゝる、花を嬉しみこゝろなき、魚さへ影にあつ  
まりて、受づる鱗にも見ゆる哉。



紫陽花

をやみなく降る梅雨の、ふるやの軒におく露も、重げに見る紫  
 陽花の、今をさかりの色ふかく。  
 花のむらさき葉の碧緑、目覚るばかり麗はじく、げに類なきはな  
 ぞとも、思ふばかりの咲振りや。  
 さあれ七たび變るてふ、色も是より褪するのみ、花のいのちの匂  
 ひさへ、無ればさかん術をなみ。  
 葉末に宿るかたつむり、花のすがたに見も遣す、折るに任せる枝  
 さへも、見返る人はなかりけり。

笠の光

たそがれてゆく窓近く、軒のわか竹ふくかせに、ちれる雫のそれ  
 ならで、飛ぶやほたるの影一つ。  
 あるひは高くまた低く、あるひは遠くまた近く、或はひかりまた  
 消ゆる、行方をしばし打見れば。  
 空よりおろす黒どばり、あやなき中に一すぢの、光をさへも見と  
 むなり、おもへ世のみち人の道。  
 ほたるあつめて幾巻の、書よまむより世の暗を、てらすはをのが  
 心ぞと、たゞ一すぢに研けかし。

朝顔

寐亂れ髪のおかつきに、淡く濃く色さまぐに、咲く朝がほの色



見れば、目さむるばかり麗しく。

よべかぞへにし蕾より、おほく咲にし葉隠れの、はなさへ見つけ  
心ゆく、ながめは盡きし中をば。

やがて萎まん様もなき、さかりの色を見頃にて、おのぶ動にいそ  
しめよ、その夜の夢の安らけ。

あくれば花は昨日にも、おどろぬまの咲振や、露のひぬ間を  
眺てるは、はなの心を知らぬなり。

秋の野

月も雲間を洩れ出で、心すますやあまの野の、けしきとなふ  
今宵哉、おもしろやはさ女郎花。

桔梗がるかや藤ばかり、名さへ優しき八千草の、おのがまに  
咲振の、繕方はぬこそ風情あれ。

色さまざまに咲く花の、いづれの枝や挿ばなん、流石に置ぞまど  
はせる、露もながく哀れにぞ。

仇なる風によかれてば、玉とみたる、虫のこそ、思ひくのふし  
つけて、何を歌ふか夜もすがら。

月の夜

見るもいぶせき塵の世に、清きを何處に求むべき、玉をのべたる  
高どのも、荒のみまさる賤が家も。

隔てはあらし見る人の、こころにすめる月影の、拭ふがごとき大



そらに、千里隈なく照らすなり。  
 いく世の秋もすむ月は、一つなれどもさす影の、所がらとてをか  
 しとも、折にふれては歎けとも。  
 人さまづくに映らなむ、われは興する此夜ごろ、雁の渡るもおも  
 しろく、虫の鳴く音もあはれ也。

菊の花

やれし垣根に吹く風の、いとも淋しき秋ながら、さくしら菊の花  
 見れば、ころろの底も晴やかに。  
 そのいろその香その姿、これを乙女に譬ふれば、花のすがたの美  
 くしさ、袂に染めて着まほしく。

塵に染まざる花のいろ、清くかをれる花の香は、これを心のかい  
 みとし、高きみさをの友と見ん。  
 あはれゆかしき菊の花、あはれやさしき菊の花、幾代かはらで乙  
 女子の、清きころろの庭に咲け。

年の暮

落散る葉にも音なくて、人目も草も枯れはてし、年のをはりは何  
 となく、物のあはれも覺ゆとぞ。  
 しかはあれども越方の、いそじみ振も來む年の、その計畫もけふ  
 見せて、嬉しきものもとしの暮。  
 唯常磐木のみどりのみ、色かど見れば軒の端に、いと美しくしき山



茶花の、一しほ目立つ咲ぶりや。  
たなみ風の聲のみぞ、音かこさけば浦千どり、友よびかはし鳴  
く節も、折に合せておもしろし。

組唄

表組目録

菜 落 (一名越天樂の曲)

これぞ眞面目なる洒落

天然樂の妙人工と同化

月夜の彈琴餘情亦一層

菜落と云ふも草の名、茗荷と云ふも草の名、富貴自在徳ありて、  
夏加あらせ給へや。  
春の花の琴曲、花風樂に柳花苑、柳花えんのうぐひすは、同じ曲  
を囀る。

月の前の調は、夜寒を告ぐる秋風、雲井の雁が音は、琴柱に落つ